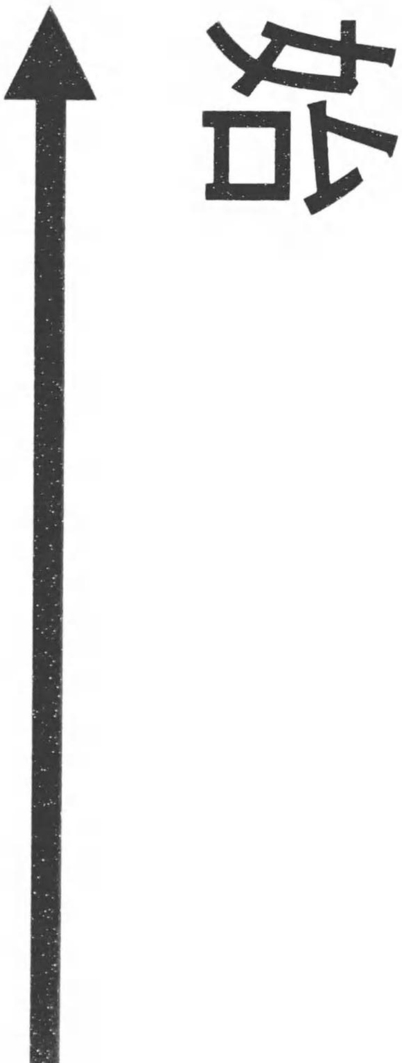
535
24



15.23

カアル・マルクス原著
河上肇譯

勞賃、價格、および利潤

一九二一年初版
一九二四年改版

弘文堂發兌

大正
13. X. 14
内交

138-24

目次

新版序言（大正十三年七月）……一
舊譯序言（大正十年十一月）……三
譯文例言……七
序言……九
一、生産と勞賃……一二
資本の分量と勞働の生産力とは絶にず變動してゐる——國民生産額は絶えず變動してゐる——一般勞賃率の騰貴の生産に及ぼす影響——勞賃額は不變の大いさのものである、といふ説の論理的歸結。
二、生産、勞賃、利潤……一九
勞賃率の一般的騰貴の生活必要品の價格に及ぼす影響——生活必要品の生産に從事してゐる資本家に及ぼす影響——贅澤品の生産に從事してゐる資本家に及ぼす影響

——利潤率に及ぼす影響——勞賃率の一般的騰貴は必ずしも生活必要品の價格の一般的騰貴を伴ふものではない——一八四九年乃至一八五九年に英國において生じた勞賃率の一般的騰貴は價格の繼續的下落を齎らした——英國に於ける農業勞賃の四〇パーセントの騰貴は農業生産物の十五パーセントの下落を齎らした。

三、勞賃と通貨……四二

低い貨幣勞賃が高い貨幣勞賃よりも、それを流通するために多額の通貨を要する場合がある——勞賃騰貴の流通通貨量に及ぼす影響——勞賃下落の流通通貨量に及ぼす影響——通貨は一定してゐるといふ獨斷は誤りである。

四、供給と需要……五三

高い勞賃とは何であり低い勞賃とは何であるか？——もし勞賃が需要供給の法則によつて決定されるとすれば、需要供給は如何なる法則によつて決定されるか？——勞働或は他の何等かの商品の價値は終局的には需要供給によつて決定されるものでない——需要供給の市場價格および價値に對する關係。

五、勞賃と價格……五八

『商品の價格は勞賃によつて決定され或は規制される』といふ獨斷論の誤謬。

六、價値と勞働……六五

商品の價値——商品が價値を有するのはそれが社會的勞働の結晶だからである——勞働の分量は勞働の繼續する時間によつて測定される——或る商品の價値の他の商品の價値に對する比は、前者に固定された勞働の分量の後者に固定された勞働の分量に對する比に等しい——勞賃は商品の價値を超過しない——勞賃は商品の價値以下であり得る——商品の交換價値を計算する方法——『社會的勞働』の意味——勞働の生産力は變動する——商品の價値に對する一般的法則——價格は價値の貨幣的表現である——價値の貨幣への轉換——價値と市場價格との關係——利潤は商品をその價値以上に賣ることからは發生しない。

七、勞働力……八七

勞働者はその勞働を賣るのでなくその勞働力を賣る——一次的の又は『本原的の』蓄

積――本原的の沒收――勞働力の價値はそれを生產し發達せしめ維持し永續せしめるに必要な生活必要品の價値によつて定まる。

八、剩餘價値の生產……九五

資本家は勞働者を勞働せしむることによつてその勞働力を消費する――勞働力の日々の價値は勞働力の日々の發揮とは別物である――剩餘勞働――剩餘價値――剩餘生產物――資本家的生產制は資本と勞働との間の『交換』に基いてゐる――交換の機構――剩餘價値率を決定する條件。

九、勞働の價値……一〇一

賃勞働と奴隷の勞働との區別――賃勞働と農奴の勞働との區別――『勞働の價値』といふ言葉は『勞働力の價値』に對する世間の俗語である。

一〇、商品を其の價値において賣ることによつて得らるゝ利潤一〇五

資本家見地から見た商品の出費と眞實の出費とは別物である。

一一、剩餘價値が分解するに至る種々なる部分……一〇八

商品の中に含まるゝ剩餘價値を利潤と名づける――產業資本家、地主、および金貸し資本家の間への剩餘價値の分割――掠奪者達の間に剩餘價値が如何に分割されても、勞働者に取つては同じことである――利潤の額――利潤率。

一二、利潤、勞賃および價格の一般關係……一一六

勞賃が下落すると利潤が騰貴する――勞賃が騰貴すると利潤が下落する――價値は勞賃の一般的騰貴によつて影響されない――商品の價格と勞働の生產力との關係。

一三、勞賃の値上げが企てられ又はその引下げが抗爭せらるゝ主要の場合……一二一

勞働の生產力の減少が勞働の價値に及ぼす影響――勞働の生產力の增加が勞働の價値に及ぼす影響――生活必要品の價格の變動が勞働の價値に及ぼす影響――勞働日の延長が勞働の價値に及ぼす影響――市價下落および恐慌が勞働の價値に及ぼす影響。

一四、資本と勞働との鬪爭および其の結果……一三七
勞働の價値の生理的要素――勞働の價値の歴史的或は社會的要素――因襲的の生活標準の勞働の價値に對する關係――利潤率は資本と勞働との鬪爭によつて決定せられる――勞働日の制限は立法的干渉によつて決定される――勞働の價値の制限は需要供給によつて決定される――資本家的生産は勞賃を低減せしめる傾向を有する――勞働組合の强みとその缺點。

新版序言

（大正十三年七月）

以前匆々の間に譯出したものを、――從てそれには誤譯やら不適當な譯やが少からずあつたのに、それを――そのまゝ世に流布してゐることが、甚しく氣になつてゐながら、長くこれを改訂するの餘裕を得なかつたが、今漸く、舊譯の全體に亘つて著しき訂正を加へ、この新版を公にして、世間に對する責務を果し得ることは、私の大に喜びとするところである。

舊譯は、啻に誤解や不適譯やを免れなかつたのみならず、それは、「社會問題研究」の一冊分に纒めるために、「價値と勞働」と題する節以下、本文の約三分の二に相當する部分だけを譯出したもので、なほ譯出した部分にも、比較的不用の個所や難解の個所をば二三省略した所があつたりしたが、この新譯には、それらをば總て補うて、首尾完き全譯となすことができた。

新たに補足した部分は、法學士宮川實氏が譯出されたものである。私はそれをば自分の筆癖に從うて改めたのみならず、多少意味をも變へたところがあり、從て譯文に對する全部の責任は私のみが負擔するのであるけれども、同學士の援助がなければ私は到底この仕事を爲し得なかつたのであるから、茲にそのことを明記して、厚く感謝の意を表する。

舊版では、この書をばマルクスの『賃勞働と資本』と合冊にして置いたが、今回版を改むるに際し、各〻獨立せしめて別々の冊子となした。

舊譯序言

（大正十年十一月）

これはマルクスが一八六五年六月二十六日に、『インタアナショナル』の總務委員會の席上で述べた演說の原稿の、後の方の約三分の二に當る箇所を翻譯したもので、譯文は大正十年九月に『社會問題研究』第二十五冊として公にしたまゝのものである。（新版において全部改訂したることは、前掲の序言にいへる如くである。——大正十三年追記）。

原本はマルクスの生前に公にされたものではない。それはマルクスも死に、エンゲルス——マルクスの遺稿を整理した彼れの親友——も死んだ後で、マルクスの遺稿中に發見されたものである。

演說の原稿は英語で綴られてあつた。それをばマルクスの娘——六人の子供の中マルクスの死後まで生き殘たのは僅に二人であつた、その中の一人——の

エリアノア・エーヴリングが其の夫のエドワード・エーヴリングと共に校訂し、之を一書と成して公にした。節を分つて其れに標題を附したのは、此等編者の仕事である。獨逸語にはベルンシュタインが翻譯した。英語本の標題は『價値、價格及び利潤』(Value, Price and Profit) としてあるが、私は獨逸本の標題(Arbeitslohn, Preis und Profit) を採つた。

この小著は、エーヴリングもベルンシュタインも共に其の序に述べてゐるやうに、私が本書の前篇として置いた『賃勞働と資本』(この新版では二つのものを別々の冊子とした——大正十三年追記) と共に、否な其れにも増して、マルクスの經濟論の要領を簡單に理解するため、最も適當な且つ最も確な手引の一つである。蓋し『賃勞働と資本』は一八四八—四九年に書かれたものだが、之は其れより十六年を經た後の一八六五年に起草されたもので、その時には既に『經濟學批判』(一八五九年刊) は出てゐたし、また『資本』の第一巻(一八六七年刊) が出たのも其れより間もなき後のことであり、なほ資本論第三巻の草稿の主たる部分は、第一巻以前に出來てゐたのだから、資本論に現はれてゐる經濟論の大體の輪廓は、この草稿の起草された當時、既にマルクスの頭に明白に描かれてゐたに相違ない。勞働問題、勞賃問題につき、彼は果して如何なる經濟論を立てたか。それを手早く知らうとせらるゝ方々に、私は敢て此の譯本を薦める。

譯文例言

一、この譯文の底本として用ひたものは、イギリスの Socialist Labour Party の發行した英語本である。但し目次中の細目は、アメリカの Socialist Labor Party の發行した Lucian Sanial 編纂本によりて補ふ。

一、括弧（　）内の六號文字は、譯者が了解の便宜のために加へた補筆である。

一、文字の傍に點々を附したのは、原文――英語本――にイタリックを使用してある所に當る。

序　言

諸君、

本論にはいる前に、少しばかりの前置きをすることを許して頂きたい。

今や大陸（ヨーロッパ大陸）においては、同盟罷業といふ眞正の流行病と、勞賃の値上げを要求する一般的の叫聲とが、廣く漲つてゐる。この問題は我が大會[1]において問題となるであらう。諸君はインタアナショナル・アッソシエーションの首腦として、[2]この重大問題について固い定見を持つて居らるべき筈である。だから私としては、諸君に最も酷い退屈な思ひをさせるといふ危險を冒しても、この問題に十分深入りするのが、自分の義務だと考へるのである。

〔註一〕一八六五年九月に開かるべきインタアナショナル・ウオーキングメンス・アッソシエーショ

ン――萬國勞働者同盟――の大會を指す。

〔註二〕今マルクスが此の話を爲しつゝある場所は、前の註に述べたインタアナショナル・ウオー・キングメンス・アツソシエーションのヂェネラル・カウンシル――萬國勞働者同盟の總務委員會――の席上であり、時は一八六五年六月二十六日である(Drahn, Marx-Bibliographie, 1920, S. 38. 參照)

も一つの前置きをば私はウェストン君についてせねばならぬ。(ヂョン・ウェストンはオウエン派の社會主義者であつて、インタアナショナルの有力な委員の一人である。彼は之より前、總務委員會の席上で、勞賃に關する論文を朗讀した。彼れの意見によれば、勞賃の額は生產物の額によつて決定されるものであるから、勞働者が同盟罷業によつて一般の勞賃率を高めやうとすることは、勞働者階級全體の利益から見て、畢竟無益であると云ふのであつた)[3]。彼は、勞働者階級のためだと考へて、勞働者階級に最も不人望だと自ら知れる意見をば、曾に諸君に(即ち此のインタアナショナルの總務委員會に)提議したばかりでなく、それを公然と辯護して

3) 堺利彥・山川均兩氏著『マルクス傳』(大正九年刊), 186頁

きた。斯かる眞勇の發揮は、吾々の總てが大に敬意を表さねばならぬところである。今私は、彼れの議論をば、その現在の形では、理論的には誤謬であり且つ實際的には危險であると考へざるを得ないけれども、しかし私は、私の論文の調子がむき出しであるに拘らず、その結論においては、彼れの議論の根底に横はつてゐる正當な思想だと私に思はれるところのものに私が一致しつゝあることを、彼が見出すに至るであらうことを希望する。

さて私は今直ちに進んで、吾々の前にある仕事に取掛るであらう。

一、生産と勞賃[1]

ウェストン君の議論は實際二つの前提に基づいてゐた、その第一は、國民の生産額は或る一定したもの、即ち數學者のよく云ふ或る不變の分量或は大さのものである、と云ふことであり、その第二は、眞實勞賃の額、即ちそれ（勞賃）を以て買ひ得る諸商品の分量によつて測定された勞賃の額は、一定したもの、即ち不變の大いさのものである、と云ふことである。

さて、彼れの第一の主張は明かに誤謬である。諸君の知らるゝやうに、年々歳々生産物の價値と分量とは增加し、國民勞働の生産力は增加し、そうしてこの遞增する生産物を流通させるために必要な貨幣の分量も絶えず變動してゐる。一年の終りにおいて、また相異なる數年を互に比較することにおいて、眞實であるところのものは、（即ち或る變動が見られると云ふことは）、同じ年の平均日

1) ベルンシユタインのドイツ譯には『國民生産物と勞賃の分前』としてある。（譯者）

の各〻にとつても、やはり眞實である（即ち變動が見られる）。國民生産物の量或は大さは、絶えず變動してゐるのである。その大さは不變のものではなくて可變のものである、そうして人口の變動を離れて見ても、資本の蓄積と勞働の生産力とに絶えざる變動があるから、それは實にそうでなくてはならない。一般勞賃率の騰貴が假に今日起つたとしても、その終局の結果はともかく、その騰貴がそれだけで直ぐに、生産額を變動させないといふことは、勿論眞實である。それ（勞賃率の騰貴）は差當り現在の狀態（國民生産額）の下に生ずるであらう。尤も（私が考へる如く）勞賃の騰貴以前に、國民生産物（の分量）が可變であつて一定してはゐなかつたものとすれば、それは勞賃騰貴の後にも、やはり可變であつて一定してはゐないであらう。

しかし國民生産額は可變でなくて不變であると假定しやう。さうした時ですら、我等の友人ウェストンが論理的歸結だと考へるところのものは、やはり理

由のない主張であらう。今一定の、例へば八といふ數があるとすると、この數の絶對的限界は、その諸部分が其等相互の相對的限界を變ずることを妨げるものではない。もし利潤が六で勞賃が二であるとすれば、勞賃を六に增加し利潤を二に減少することが出來る、そうしても尙ほ總量は依然として八である。だから生產額が一定してゐるからと云つても、それは決して勞賃額が一定してゐるといふ證明にはならぬ。しからば、我等の友人ウェストンは、如何にして勞賃の一定不變なることを證明せんとするのか？　曰く、たゞ其れを（生產額が一定して居れば勞賃額も一定すべきであるといふことを）主張することによつて。

しかし假りに一歩を讓つて彼れの主張を正しとするも、――彼はたゞ一方にのみ議論を進めるに拘らず、――實はその同じ理論が兩方面に等しく適用され得るのである。（即ち）もしも勞賃額が或る不變の大さのものとすれば、それは增加することも減少することも出來ない筈である。だから若し勞賃の一時的値上げを强制せんとする勞働者の行動が愚であるならば、勞賃の一時的引下げを强制せんとする資本家の行動もまた同樣に愚であらう。我等の友人ウェストンは、（一方においては）一定の事情の下では、勞働者が勞賃の値上げを强制し得ることを否定しない、たゞ勞賃額は自然的に一定してゐるから、後で必ず反動が起らねばならぬといふのだ。また他方において彼は、資本家が勞賃の引下げを强制し得ること、また實際それを强行せんと絶えず努めてゐることを、知つてゐる。（ところで）かの勞賃不變の原則に從へば、前の場合と等しくこの後の場合にも、或る反動が引續き起る筈である。さすれば、（資本家の）勞賃引下げの企または行動に對して、勞働者が反動を起すのは、正しい譯にならう。ところで勞賃の引下げに對する有らゆる反動は、やがて勞賃の値上げのための動であるから、つまり勞働者が勞賃の値上げを强制することも、正しい譯にならう。それだからウェストン君自身の勞賃不變の原則に從へば、勞働者達は一定の事情の下では、

勞賃の値上げのために、團結し且つ鬪爭せねばならぬことゝなる。

もし彼が此の結論を否定するならば、彼はその結論の依て生ずる前提をも捨てなければならない。(即ち)彼は、勞賃額は不變の分量であると言つてはならない、寧ろ、それは引上げ得られないし、また引上げてはならぬが、しかし資本(家)がそれを引下げたいと思ふならば、何時でも、それは引下げ得られるし、また引下げられねばならぬ、と言ふべきである。(そこで此の說に從へば)もし資本家が、諸君を肉の代りに馬鈴薯で、小麥の代りに燕麥で養ひたいと思ふならば、諸君は喜んで彼れの意志を經濟學の一法則として受け容れ、それに從はねばならない。また若し或る國における勞賃率が他の國におけるよりも、例へばアメリカにおける方がイギリスにおけるよりも、高いならば、諸君はこの勞賃率の差を、アメリカの資本家の意志とイギリスの資本家の意志との差によつて、說明しなければならないのである、——この方法は確かに、曾に經濟現象の研究

のみならず、總ての他の現象の研究をも、大いに單純化するに相違ない。

しかしその場合においてすら、吾々は質問を發し得る、——何故アメリカの資本家の意志はイギリスの資本家の意志と異つてゐるか？ そうして此の質問に答へるためには、諸君は意志の範圍以外に出なければならなくなる。(何故といふに)、或は人あつて、神はフランスにおいては一つの事を意志し、イギリスにおいては他の事を意志する、と說明するかも知れない。(そうして)もし私が(更に)彼に向つて、意志の此の二元性の說明を求めたなら、彼は鐵面皮にも、神はフランスにおいては一つの意志を持ちイギリスにおいては他の意志を持つことを意志する、と答へるかも知れない。しかし我等の友人ウェストンに至つては、斷じてそんな、總ての推理を否定しきつた議論をする人ではない。

資本家の意志は確かに、出來るだけ多く取らうとするにある。が我々の仕事は彼れの意志について語ることではなくて、彼れの力、その力の限界、および

此等限界の性質を研究することである。

二、生産、勞賃、利潤[1]

ウェストン君が吾々に向つて讀まれた演説は、恐らく一言に縮めて仕まふことが出來たであらう。

彼れの總ての推論は斯ういふことに歸する、もし勞働者階級が資本家階級を强制して、貨幣勞賃の形態で四シリングの代りに五シリングを支拂はしむるならば、資本家は商品の形態で（勞働者が資本家的商品を買ふために支拂ふ五シリングに對して）四シリングの價値を返すであらう。（即ち）勞働者階級は、勞賃の値上げ以前に四シリングで買つたものに對して、五シリングを支拂はねばならぬであらう。しかし何故さうなるのであるか？　何故資本家は五シリングに對にして單に四シリングの値打だけのものを返すに止まるのか？　それは勞賃の額（それを以て買ひ得る諸商品の分量で測つた勞賃の額）が一定してゐるからである。しかし何故それは四

1) ドイツ譯には『勞賃の變動が生産物の分量および種類に及ぼす影響』としてある。（譯者）

シリングだけの値打の商品に一定してゐるのか？　何故三シリングとか二シリングとか或はその他の或る額に一定しないのか？　もし勞賃額の此の制限が、資本家の意志からも、また勞働者の意志からも一樣に獨立してゐる、一つの經濟法則によつて決定されるものならば、ウェストン君の先づ第一に爲すべきことは、その法則を記述し且つ其れを論證することに在つた筈だ。それから更にまた彼は、あらゆる一定の時において事實上支拂はれる勞賃額が、何時でも正確に必然的の勞賃額に相當して居り、決して其れと背離してゐないと云ふことを、證明すべきであつた。（しかるに）もし他方において、勞賃額についての一定の限度が、資本家の單なる意志に、或はその貪慾の限度に基づいてゐるものとするならば、それは勝手次第な限度である。それには何等必然的のものが無い。それは資本家の意志によつて變化され得るし、從て又、彼れの意志に逆つても變化され得るものとなるであらう。

ウェストン君は自分の說を例證するために、或る一定量のスープを盛つた一個の鉢があつて、これを或る一定數の人々が飲む場合には、スプーンの廣さを增したからとて、そのためにスープの分量が增加することはないだらう、と諸君に話した。彼に對しては誠にすまない譯だが、この例が私には可なり甘いものに見ゐる。それは私に、メネニウス・アグリッパの用ひた喩を一寸思ひ出さしめる。ローマの平民達がローマの貴族達に對して反抗した時に、貴族のアグリッパは平民達に告ぐるに、貴族といふ腹は同じ政治團體に屬する平民といふ手足を養ふ、と云ふことを以てした。（けれども）アグリッパは、吾々が或る人の腹を充すことによつて別の人の四肢を養ひ得ると云ふことを、證明し得なかつた。今ウェストン君の忘れたところは、勞働者達が食物を其れから得つゝある鉢は、國民勞働の全生產物で充たされてゐるといふことゝ、且つ彼等が其れから、より多くを取つて來ることが出來ないのは、鉢が狹いからでも其の內容が少な

2)原文に spoony とあるのが前の spoon に續いて一寸皮肉に聞にる。私は其れをスープに藉かせて甘いと譯出した。（譯者）

いからでもなくて、唯だ彼等のスプーンが小さいからだといふことゝである。

如何なる仕掛けによつて、資本家は、五シリングに對して四シリングの値打しかないものを返すことが出來るか？（それは）彼が賣るところの商品の價格を値上げすることによつて。しからば今その商品の價格の値上げ、より一般的に云へばその變動、つまり商品の價格そのものは、資本家の單なる意志に依存してゐるのか？ それとも、これに反して、その意志を實現するためには、一定の事情が必要とされてゐるのか？ もしその必要がないとすれば、市場價格の騰落即ち絶えざる變動は、一個の解くべからざる謎となる。

吾々が假定したやうに、勞働の生産力にも、使用される資本および勞働の分量にも、また之によつて生産物の價値が評價されるところの貨幣の價値にも、何等の變動がなくて、ただ單に勞賃率にのみ變動があつた場合に、一體如何にしてその勞賃の騰貴が、諸商品の價格に影響し得るのであるか？ 曰く、それはたゞ單に、此等の諸商品に對する需要とその供給との間における事實上の比例に影響することに依つてのみ。

勿論勞働者階級は、之を全體として考へると、その所得をば生活必要品に費して居り、また費さざるを得ないのである。だから勞賃率の一般的騰貴は、生活必要品の需要に對する需要の增加を、從てまたその市場價格の騰貴を惹き起す。そこで此等の生活必要品を生産する資本家達は、彼等の（生産する）商品の騰貴せる市場價格によつて、騰貴せる勞賃を埋め合はすであらう。しかし生活必要品を生産しない他の資本家達（即ち贅澤品を生産する資本家達）はどうであるか？ しかも諸君は彼等が少數であると思つてはならない。もし諸君が、（イギリスの）國民生産物の三分の二は人口の五分の一——下院の一議員は最近に人口の七分の一に過ぎないと述べた——によつて消費されてゐる、といふ事實を熟考するならば、諸君は、國民生産物の如何に莫大なる割合が、贅澤品の形において、或は

贅澤品と交換(外國で生産せられた贅澤品との交換を指す)するために、生産されねばならないか、そうして生活必要品そのものゝ如何に莫大な分量が、家庭の使用人や馬や猫などに浪費されねばならないか、を了解するであらう。——尤もこの浪費は、吾々の經驗に照せば、生活必要品の價格の騰貴につれて、必ず大に制限されるものではあるが。

さて生活必要品を生産しない此等の資本家の地位はどうであらうか？　彼等は、勞賃の一般的騰貴の結果生ずる利潤率の下落を、彼等の(生産する)商品の價格の騰貴によつて、埋め合はすことは出來ない。何故なれば此等の商品に對する需要は增加しないであらうから。そこで彼等の所得は減少する、しかも此の減少した所得の中から、彼等は、價格の騰貴した生活必要品の同一分量を得るために、(以前よりも)より多くを支拂はねばならない。けれども單にこれ許りではない。彼等の所得が減少するにつれて、彼等が贅澤品に費す金は少くなり、從て彼等の(生産する)それ〴〵の商品に對する彼等相互の需要が減少する。この需要減少の結果として、彼等の商品の價格は下落するであらう。だから此等の産業部門においては、利潤率の下落は、曾に勞賃率の一般的騰貴に單比例をなすのみでなく、勞賃の一般的騰貴、生活必要品の價格の騰貴、および贅澤品の價格の下落に複比例するであらう。

別々の産業部門に用ひらるゝそれぞれの資本に對して生ずる利潤率の此の差異は、如何なる結果を齎らすであらうか？　云ふまでもなく其れは、何等かの理由で平均利潤率が、別々の生産部門において差異を生ずるに至つた時、いつも一般に生ずる結果と同じものである。資本と勞働とは、利益の少ない部門から利益の多い部門に向つて移動するであらう、そうして此の移動の進行は、一産業部門における供給がその增加した需要に釣り合ふまで增加し、他の部門における供給がその減少した需要に釣り合ふまで減少するに至つて止むであら

う。この變動が完了すると、一般利潤率は別々の諸部門において再び平均さるゝに至るであらう。蓋し總ての狂ひは元と、別々の商品に對する需要と其の供給との比例における單なる變動のためにのみ生じたのであるから、その原因が止めばその結果も止み、そうして物價はその以前の水準と平衡とに復するであらう。(かくて)勞賃騰貴のために生ずる利潤率の下落は、ある産業部門に限られることなくして、一般的のものとなるであらう。さきの假定に從へば、勞働の生産力にも、生産の總額にも、何等の變動は起らず、たゞ生産物の一定額がその形態を變ずるに止まるであらう。(即ち)生産物のより多くの部分が生活必要品の形で存在し、そのより少き部分が贅澤品の形で存在することになるか、或は、結局同じことになるのだが、より少き部分が外國の贅澤品と交換され、より多くの部分が其の本來の形において(即ち生活必要品のまゝで)消費されることになるか、或は、これもまた同じ事になるが、國内生産物のより多くの部分が外國

3)『より多くの部分が』はドイツ譯によりて補ふ。(譯者)

産の贅澤品との代りに生活必要品と交換されるに至るであらう。かくて勞賃率の一般的騰貴は、一時的に市場價格を攪亂した後、諸商品の價格には何等永久的の變動を殘すことなくして只だ利潤率の一般的下落を齎すに止まるであらう。

以上の議論において私が剩餘勞賃(勞賃の騰貴のため增加した部分)の全部をば生活必要品にのみ費されると假定してゐることを、もし非難する者があるならば、私はそれに答ふるに、私は此の假定をばウェストン君の意見に最も有利なやうにしたのだと云ふことを以てする。もしも剩餘勞賃が、勞働者の消費範圍に以前は屬してゐなかつた品物の上に費されるものとすれば、彼等の購買力が眞に增加したと云ふことは、一目瞭然であらう。けれども彼等の購買力の增加は、勞賃の增進(騰貴)からのみ生ずるのであるから、それは正確に資本家の購買力の減少と相對應する筈である。だから諸商品に對する總需要は增加しないで、たゞその需要の構成部分が變動するのみであらう。一方における需要の遞增は他

方における需要の逓減によつて平均されるであらう。此の如くして總需要は不動の狀態を保ち、商品の市場價格には何等の變動も起り得ないであらう。

そこで諸君は次のディレムマに達する、剩餘勞賃（勞賃率騰貴のために增加した部分の勞賃）は總ての消費財（生活必要品ならびに奢侈品）に一樣に費されるか、――この場合には勞働者階級の側における需要の膨脹は、資本家階級の側における需要の收縮によつて埋め合はされねばならぬ、――或はまた剩餘勞賃はたゞ或る種の品物（生活必要品）にのみ費されて、そのものの市場價格が一時的に騰貴するか。この（後の）場合には、その結果として生ずるところの、或る種の產業部門における利潤率の騰貴と、他の種の產業部門における利潤率の下落とが、資本と勞働との分配（各種の產業部門に向つての分配）に變動を來し、そうして終に供給が、前の產業部門においては增進した需要に釣り合ふまで增加され、後の產業部門においては減退した需要に釣り合ふまで減少されるであらう。（要するに）前の假定の下にお

いては、諸商品の價格には何等の變動も起らないであらう。後の假定の下においては、市場價格の多少の動搖の後、諸商品の交換價値は以前の水準に落ちつくであらう。（卽ち）双方の假定の下において（その何れに從ふも）、勞賃率の一般的騰貴は、結局、たゞ利潤率の一般的下落を生ずるに過ぎないであらう。

諸君の想像力を煽るために、ウェストン君は、もしイギリスの農業勞賃が一般に九シリングから十八シリングに騰貴したならば、如何なる困難が生ずるかを考へて見給へ、と云つた。生活必要品に對する需要の莫大なる增加と、そのために生ずる之が價格の恐るべき騰貴とを考へて見給へ！　と彼は叫んだ。さて、諸君の總てが知つて居られるやうに、アメリカの農業勞働者の平均勞賃は、イギリスの農業勞働者の平均勞賃の二倍以上であるが、しかも農業生產物の價格はアメリカの方がイギリスよりも低く、しかも又、資本と勞働との一般的關係はアメリカにおいてもイギリスにおけると同樣であり、そうして年々の生產

額もイギリスにおけるよりはアメリカにおける方が遙かに少いのである。[4] しからば、何故我が友はこの警鐘をならすのか？　それは單に、我々の前に横はる眞の問題を外らすためにだ。九シリングから十八シリングへの勞賃の突飛なる騰貴は、百パーセントに上ぼる突飛なる騰貴である。（けれども）今我々は、イギリスにおける一般勞賃率が突然百パーセントも騰貴し得るか否か、といふ問題を議論してゐるのでは全くない。吾々はその騰貴の大さには全く用がない、それは各〻實際の場合において與へられたる事情に依存し且つ其れに適應しなければならないものである。吾々はたゞ、勞賃率の一般的騰貴が――たとひ其れは一パーセントに限られたものであつても――如何なる働きをなすかを明かにすべきである。

ウェストン君の空想的なる百パーセントの騰貴は姑くこれを舍き、私は諸君の注意を、一八四九年乃至一八五九年にイギリスに起つた現實なる勞賃の騰貴

4) イギリスの社會勞働黨から出した版本における Lucian Senial の脚註。――『マルクスが此の文章を書いてから、既に三十五年（今から言へば殆ど六十年）を經過したが、その間、英米兩國の相對的事情は、啻に農業においてのみならず、生産の總ての方面に亘つて、著しき變化を經たと云ふこと、しかし其れは、マルクスの議論および結論に何等の影響をも與へぬと云ふことは、殆ど言ふを俟たぬであらう』。

に向けたく思ふ。

諸君は皆、一八四八年以來採用された十時間法、正確に言へば十時間半法なるもの（勞働時間制限法を指す）を知つてゐる。これは吾々の目擊せる最も大なる經濟的變動の一つであつた。それは或る地方的の事業においてゝはなく、英國が依つて以て世界の市場を支配してゐるところの、主要なる諸産業部門において生じたる、突然にして且つ強制的なる勞賃の値上げであつた。（しかも）それは妙に都合の惡い事情の下で生じた勞賃の値上げであつた。ユーア博士や、シーニョア教授や、その他中産階級の總ての經濟的御用代辯者達は、――私は敢ていふ、それは確に我がウェストンの場合よりも遙により有力な論據に基づいて、――それは英國産業の葬鐘を鳴らすものだと證明した。彼等の證明したところは、それは（勞働時間制限法は）啻に勞賃の單純なる値上げに歸着するのみでなく、使用される勞働量の減少のために起り且つそれに基づいてゐるところの、勞賃の

騰貴に歸着する、と云ふことであつた。彼等の主張したところは、吾々が資本家から奪はうと欲した第十二時間目こそ、正に資本家が其れから彼れの利潤を獲得したところの唯一の時間だ、と云ふことであつた。彼等はこれがために資本蓄積の減少、物價の騰貴、市場の喪失、生產の縮少、その結果として生ずる勞賃への反動、窮極の破滅が起ると威嚇した。實際彼等は、マキシミリアン・ロープスピアーの（生活必要品に關する）最高價格法[5]も此れに較ぶれば物の數にも入らぬ、とまで明言した、そうして彼等は或る意味では正しかつたのである。さて、その結果はどうであつたか？　勞働日（一日の勞働時間）の短縮にも拘はらず工場勞働者の貨幣勞賃の騰貴、雇用せらるゝ職工數の大なる增加、彼等の生產物の價格の引き續いての下落、彼等の勞働の生產力の驚くべき發達、彼等の（生產せる）商品に對する市場の未曾有なる累進的擴張が卽ち其れであつた。マンチェスタアで、一八六〇年に、科學進步協會の會合の席上で、私が親しく聞いたところだが、當時ニューマン氏は、彼や、博士ユーアや、シーニョアや、その他經濟學の御用提議者達は皆な間違つてゐて、民衆の本能の方が正しかつたと云ふことを、告白した。私がこゝにフランシス・ニューマン敎授でなくダブルユー・ニューマン氏を擧げたのは、彼が、一七九三年から一八五六年に至る間の、物價の歷史を研究したあの立派な書物、トマス・トゥーク氏の「物價史」の寄稿者および編輯者として、經濟學上顯著な地位を占めてゐるからである。我等の友人ウェストンの固定的な考が、卽ち勞賃額は固定したものであり、生產額も固定したものであり、勞働の生產力の程度も固定したものであり、資本家の意志も固定的な且つ恒久的なものであり、その他何もかも彼れの云ふやうに固定的且つ斷定的なものであると云ふ考が、もし正いとするならば、シーニョア敎授の悲しい豫言は正しかつたであつたらうと同時に、かのロバアト・オウエン――已に一八一六年に、勞働日（一日の勞働時間）を一般的に制限することが勞働階級解

5) Maximilian Robespiere's Maximum Laws.

放の準備の第一歩であると聲明し、そうして實際に一般の偏見をものともせず、ニュー・ラナアクの彼れの紡績工場において、獨力を以て之を實現したる彼れ――は、却て誤つてゐたであらう。

十時間法の採用および其の結果としての勞賃の騰貴が生起したと丁度同じ期間に、色々の理由のために――その理由をこゝに列擧するのは所を得ないであらう――イギリスにおいては、農業勞賃の一般的騰貴が起つた。

私の直接の目的のためには必要のない事だけれど、諸君の誤解を防ぐため、私は茲に若干の前置としての注意をなすであらう。

或る人が毎週の勞賃二シリングを得てゐた場合に、その勞賃が四シリングに騰貴したとすると、勞賃率は百パーセントだけ騰貴したことになる。これは勞賃率の騰貴として云ひ表はすと、非常にすばらしいものと思へるが、しかし實際の勞賃額たる毎週四シリングの高は、依然として極めて少ない食ふか食はずの端くれ金に過ぎない。それだから諸君は勞賃の率に關する仰々しいパーセンテーヂに心を奪はれてはならない。諸君は常に問はねばならぬ、初めの勞賃額はいくらであつたかと。

更に解りきつた事であるが、毎週二シリング宛を受けとる者十人と、五シリング宛を受けとるもの五人と、毎週十一シリング宛を受けとる者五人とがゐるならば、その二十人の者を一緒にすると、毎週百シリング卽ち五ポンドを受けとることになる。そこで彼等の毎週の勞賃の總體の額の上に或る騰貴、例へば二十パーセントの騰貴が生じたとすれば、それは五ポンドから六ポンドに增進するであらう。（斯かる場合に）平均をとれば一般勞賃率は二十パーセントだけ騰貴したと言ひ得るが、しかし實際においては、その中の十人の勞賃は依然として元のまゝであり、その一組の五人の勞賃はただ五シリングから六シリングに騰貴しただけであり、そうして他の一組の五人の勞賃が五十五シリングから七

十シリングに騰貴したといふ場合もある。（もしさうだとすると）その人達の半數は彼等の地位を少しも改善しないし、四分の一は殆んど眼に見えない程度にのみ改善し、たゞ（殘りの）四分の一のみが眞に彼等の地位を改善したであらう。それでも尙ほ平均で計算すると、此等二十人の勞賃の總額は二十パーセントだけ增加したことになり、そうして彼等を使用する總資本および彼等の生產する諸商品の價格が關係する限りにおいては、彼等の總てが一樣に勞賃の平均的騰貴に與かつたのと全く同じであるだらう。農業勞働の場合には、標準勞賃がイングランドおよびスコットランドの種々な州で非常に相違してゐたので、勞賃騰貴の勞働者に及ぼす影響は甚しく不同であつた。

最後に注意して置くが、あの勞賃騰貴の起つた期間には、ロシア戰役の結果種々の新租稅が課せられたる如き、廣く農業勞働者の住宅が破壞されたるが如き、種々の反對勢力が働いてゐたのである。

さて、これだけの前置きをしておいて、進んで述ぶべきことは、一八四九年から一八五九年までの間に、イギリスにおける農業勞賃の平均率は、殆んど四十パーセントの騰貴をなしたと云ふことである。私はこの私の主張を立證するため諸君に向つて十分詳細な話をすることが出來るが、しかし現在の目的のためには、諸君に、一八六〇年故ヂョン・シー・モルトン氏がロンドン技術協會で讀んだところの、The Forces used in Agriculture といふ眞面目な批評的な論文を指示するだけで十分だと考へる。モルトン氏は、スコットランドの十二州およびイングランドの三十五州に住める約百人の農夫から聚めたところの、諸〻の勘定書やその他の信憑すべき書類に基づいて、この報告書を作つたのである。

（農業勞働者の勞賃は斯樣に騰貴したのだから、今）我等の友人ウェストンの意見を正しとすれば、さうして同時に起つた工場勞働者の勞賃の騰貴をも併せ考ふれば、一

八四九年乃至一八五九年の期間には、農産物の價格の上にすばらしい騰貴が起つてゐなければならぬ筈である。しかし事實は果してどうであつたか？　ロシア戰役があり、且つ一八五四年から一八五六年まで引き續いての不作があつたにも拘はらず、イングランドの主要農産物たる小麥の平均價格は、一八三八乃至一八四八の諸年には一クォーター約三ポンドであつたものが、一八四九乃至一八五九の諸年には一クォーター二ポンド十シリングに下落した。これは四十パーセントに上ぼる農業上の勞賃の平均的騰貴があつたに拘はらず、それと同時に十六パーセント以上の小麥の價格の下落があつたと云ふことである。この同じ期間において、その始めと終りとを、即ち一八四九年と一八五九年とを比較すると、公の被救恤者の數は九三四、四一九から八六〇、四七〇に減少し、その差は七三、九四九であつた、成る程これは非常に少ない減少に相違ない、さうして其れすら其の次の數年には再び無くなつたが、しかしそれでも矢張り減少には違ひない。

穀物條例が廢止されたために、一八四九年乃至一八五九年の期間には、一八三八年乃至一八四八年の期間に比較して、外國穀物の輸入が二倍以上だつたと云つて差支えない。そうしてその結果はどうであつたか？　ウェストン君の立場に從ふものは、外國市場に對する此の突然な、莫大な、且つ繼續的な需要の增加は、外國市場における農産物の價格を驚くべき高さに騰貴せしめたに違ひない、と豫期するであらう、需要增加の影響は、それが國外から來ても國內から起つても、變りのあるべき筈はないから。（ところで）事實は果してどうであつたか？　不作の數年を除外すれば、あの全期間內、穀物の價格が破滅を來たすほど下落したために、フランスではそれが絕えず世論の題目となつた、アメリカ人は再三再四彼等の生產物の剩餘を燒かねばならなかつた、そうしてロシアは、もし吾々がウルクハルト氏を信ずべきであるならば、自國の農業輸出品

が、ヤンキーの競爭のためにヨーロッパの市場で賣り捌けなくなつたものだから、合衆國における南北戰爭をたきつけたのである。

ウェストン君の議論は、これを抽象的の形に還元すると、こういふことになる、總て需要の增加は必ず一定の生產額の基礎の上に生ずる。だから、需要の增加は、決して需要される諸商品の供給を增加し得るものではなく、單にそれら商品の貨幣價格を騰貴せしめ得るに過ぎない。さて、一寸考へれば直ぐ解るやうに、或る場合には、需要が增加しても諸商品の市場價格は全く變化しないし、そうして又他の場合には、需要が增加すると市場價格が一時的に騰貴し、次いで供給が增加し、次いでその價格が元との水準に、そうして多くの場合には元との水準以下に下落するものである。需要の增加が剩餘の勞賃（勞賃が騰貴したために增加した部分の勞賃）から生ずるか、或は何か他の原因から生ずるかは、少しも此の問題の事情を變化するものではない。（然るに）ウェストン君の立場からは、この一般的現象を說明するのも、勞賃騰貴といふ例外的事情の下に起る現象を說明するのも、共に同じやうに困難であつた。だから彼れの議論は、我々の論じてゐる問題に對しては、何等特殊の關係を有たなかつた。彼れの議論はたゞ彼が、需要の增加は結局市場價格の騰貴を齎すものでなくて、寧ろ供給の增加を齎すものであると言ふ法則を明かにするため、如何に當惑してゐるか、を表はしてゐるに過ぎない。

三、勞賃と通貨[1]

討議の第二日に我等の友人ウェストンは、彼れの古い主張を新しい形式で裝うた。彼は言ふ、貨幣勞賃が一般的騰貴をすると、その勞賃を支拂ふために、より多くの通貨が必要とされるに至るであらう。通貨(の分量)は一定してゐるのに、如何にしてこの一定した通貨(の量)を以つて、增加した貨幣勞賃を支拂ふことが出來るのか？　最初の困難(これは前の章に論じた問題)は、勞働者の貨幣勞賃が騰貴したにも拘らず、勞働者の手に歸すべき商品の分量が一定してゐるために生じた、今はそれが(これは以下本章で論ずる問題)、商品の分量が一定してゐるにも拘はらず、貨幣勞賃が騰貴するために生ずる。言ふまでもなく、もし諸君が彼れの最初の獨斷を排斥するならば、彼れの第二の難題も自から消え去るであらう。

1) ドイツ譯には『勞賃の變動(騰落)と通貨の變動(增減)』と題す。(譯者)

けれども私は、この通貨問題が、今吾々の前にある題目と、全く何等の關係を有たないことを示すとしやう。

諸君の國(イギリス)においては、支拂の機構がヨーロッパの他のどの國におけるよりも遙によく完成されてゐる。銀行制度が擴張され集中されてゐるお蔭で、同一量の價値を流通させるために、從てまた、同一なる或はより大なる量の取引を行ふために、必要とされる通貨(の分量)が、(他の諸國と比較して)非常に少くてすむ。例へば勞賃に關する範圍だけで言つて見ても、イギリスの工場勞働者は、自分の勞賃(として得た通貨)を毎週小賣商人に支拂ひ、その小資商人はこれを毎週銀行家に送り、その銀行家はこれを工場工業家に返し、その工場工業家は再びこれを自分の勞働者に支拂ひ、かくて更に同じことが繰り返される。この仕組によつて、一人の職工の毎年の勞賃例へば五十二ポンドは、毎週同一の循環をなしてゐる唯だ一個の一ポンド金貨で支拂ふことが出來る。イングラン

ドにおいてすら、この機構は、スコットランドにおけるほど完全なものではなく、そうしてまた其の各地方みな同じ程度に完成されてもゐない、だから吾々は、例へば或る農業地方においては、これを工業のみ行つてゐる地方に比較すれば、遙により小量の價値を流通させるために、遙により多量の通貨を必要としつゝあることを、發見するのである。

もし諸君が海峽を越えると、貨幣勞賃はイングランドにおけるよりも遙に低いが、しかも其れが、ドイツ、イタリー、スイス、およびフランスにおいては、遙により多量の通貨によつて流通されてゐることに、氣付くだらう。（これ等の諸國においては）同一の貨幣が、そんなに早く銀行家に受入れられないし、また產業資本家の手にも還つて來ない、だから、一個の一ポンド金貨が毎年五十二ポンドを流通させる代りに、恐らく、二十ポンドだけの年々の勞賃を流通させるために三個の一ポンド金貨が必要とされるであらう。此の如く大陸諸國とイングランドとを比較することによつて吾々の看取し得ることは、低い貨幣勞賃が高い貨幣勞賃よりも、その流通のために遙により多くの通貨を必要とする場合があり得る、といふこと、および之は、我々の論じてゐる問題に對しては、實際、全く關係のない專門上の問題にすぎない、といふことである。

私の知つてゐる最良の統計に從へば、この國の勞働階級の年所得は、二億五千萬ポンドと見積つて宜しい。この巨大なる金額が凡そ三百萬ポンド（の通貨）によつて流通されてゐる。今、勞賃が五十パーセントだけ騰貴したと假定しやう。さうすると、三百萬ポンドの代りに、四百五十萬ポンドの通貨が必要とされるであらう。（ところが）勞働者の日々の出費の可なりの大部分は、銀貨と銅貨とによつて、卽ちその金に對する相對的價値が、不換紙幣のそれのやうに、法律によつて任意に定めらるゝ只の名目貨幣によつて、支拂はれてゐるから、貨幣勞賃の五十パーセントの騰貴は、（前に述べたやうに、三百萬ポンドの代りに四百五十萬ポ

ンドの通貨を必要とするのだから)、その極端な場合には、例へば百萬ポンドの金貨の追加流通を必要とするであらう。そこでイングランド銀行の、或は私營銀行の地下室に、地金または鑄貨の形で今まで眠つてゐた百萬ポンドが、流通することになる。けれども、その百萬ポンドの追加鑄造または追加摩損——流通貨幣の增加の必要から幾らかの新たな摩損が起るものと假定すれば——から生ずる些少な出費をすら、これを省かうと思へば省き得るのであり、また事實省かれるであらう。諸君の皆知らるゝやうに、この國の通貨は二大部門に分たれてゐる。その一つの種類は種々なる額面の銀行劵であつて、商人と商人との間の取引および消買者の商人に對する多額の支拂ひに用ひられ、同時に他の種類の通貨、卽ち金屬貨幣は、小賣取引に流通してゐる。此等二種の通貨は、別々のものではあるが、その機能は相互に交錯してゐる。例へば多額の支拂ひの場合においてすら、五磅以下の半端な額を支拂ふためには、金貨が、隨分の分量に達

するまで、流通してゐる。だから、もし明日にも四ポンド劵、或は三ポンド劵、或は二ポンド劵が發行されるとすると、此等の流通徑路を充たしてゐた金貨は直ちに其處から追ひ出され、其等のものが貨幣勞賃の騰貴のために必要とされるであらう方面の徑路に流れ込むであらう。かくして、勞賃が五十パーセントだけ騰貴したために更に必要となつた百萬ポンドは、たゞ一個の金貨をも追加せずして供給せらるゝであらう。これと同じ效果は、銀行劵一枚をすら增さなくても、隨分久しい間ランカシャア州で行はれてゐるやうに、手形の流通額を追加することによつても、生じ得るのである。

勞賃率における一般的騰貴が、例へばウェストン君が農業勞賃において生ずると假定したやうな百パーセントの一般的騰貴が、もし生活必要品の價格における甚しき騰貴を生ずるものとすれば、そうして彼れの考ふる如く、これがためには通貨の追加量を必要とするも之れを得ることが出來ないものとすれば、

勞賃の一般的下落もまた、同じ結果を、同じ規模で、反對の方向に生ずべき筈である。よろしい！　諸君の皆な知らるゝやうに、一八五八年乃至一八六〇年の諸年は紡績業の最も盛な年であつた、そうして殊に一八六〇年はその點において商業史上比類なきものであり、また同時に他の總ての部門の產業も隆盛を極めてゐた。紡績職工および紡績業に關係する總ての他の勞働者の勞賃は、一八六〇年においては、未曾有の高さに上つてゐた。ところへ米國の恐慌がきた、そうして此等總ての勞賃が突然に以前の額の四分の一に下落した。これがもし反對の方向だつたら四百パーセント騰貴したことになるのである。（といふ譯は）もし勞賃が五から二十に騰貴すれば、吾々は勞賃が四百パーセント騰貴したといふ、（しかるに）もし二十から五に下落すれば、吾々は勞賃が七十五パーセント下落したといふ、しかし前の場合における騰貴額と、後の場合における下落額とは、同じことであつて、即ち共に一五シリングなのである。さういふ

譯で、この變動は勞賃率における未曾有なる突然の變動であり、同時に其れは、――吾々がもし啻に紡績業に直接從事してゐる職工のみならず、間接にそれに依存してゐる總ての職工をも數へるならば、――農業勞働者數の一倍半以上にも匹敵する數の職工に及んだものである。（さて此の場合に果して）小麥の價格は下落したか？　それは一八五八年から一八六〇年の三年間に一クォーターにつき年平均四十七シリング八ペンスであつたものが、一八六一年から一八六三年の三年間には、一クォーターにつき年平均五十五シリング十ペンスに騰貴した。それでは通貨はどうであつたかと云ふと、一八六〇年には三、三七八、七九二ポンドだけ造幣局で鑄造されたに對し、一八六一年には八、六七三、二三二ポンドだけ鑄造された。即ち一八六一年には一八六〇年におけるよりも五、二九四、四四〇ポンドだけより多く鑄造されたのである。なるほど、銀行券の流通は、一八六一年には一八六〇年におけるよりも、一、三一九、〇〇〇ポンドだけ少

かつた。これを差し引かう。それでも尙ほ通貨は、繁榮の年なりし一八六〇年に比較して、一八六一年の方が、三、九七五、四四〇ポンド卽ち凡そ四、〇〇〇、〇〇〇ポンドだけ多かつた、しかしイングランド銀行における地金準備は、全く同じではないが略ぼそれに近い割合で、同時に減少してゐたのである。

（更に）一八六二年と一八四二年とを比較せよ。流通せる諸商品の價値と分量とが莫大な增加をなしたことを除いて考へても、一八六二年には、イングランドおよびウェイルスにおける鐵道の株劵や社債やに對する正規の拂込のため支拂はれた資本のみで、三億二千萬ポンドになるが、この金額は、一八四二年においては信ずべからざるものと思はれたであらう。それだのに、一八六二年と一八四二年との通貨の總量は先づ殆んど等しかつた、そうして一般的に言へば、たゞに諸商品の價値のみならず、一般に貨幣取引の價値は、著しき增加を續けてゐるにも拘らず、通貨（の分量）の上には漸次的減少の傾向が認められるのである。このことは、我等の友人ウェストンの立場からは、全く解くべからざる一個の謎である。

もし彼にして今少し深く此の問題を考察したならば、恐らく彼は、――勞賃の問題は全く之を度外におき、之をば一定不變なものと假定しても、――流通せらるべき商品の價値および分量は、また一般的に決濟せらるべき貨幣取引の額は、日々に變動すると云ふことに氣付き、また銀行劵の發行額も日々に變動すると云ふこと、また何等貨幣の仲介を俟たず、手形、小切手、帳簿上の信用、手形交換所等の媒介によつて、實現せらるゝ支拂の金額も、日々に變動すると云ふこと、また現實の金屬貨幣が必要とされる限りにおいては、世上に流通する鑄貨と、銀行の準備金とされてゐる又は銀行の地下室で眠つてゐる鑄貨および地金との比例も、日々に變動するものだと云ふこと、また國內の流通のため吸收される地金の分量と、國際間の流通のため國外に送り出される地金の

分量とも、日々に變動するものだと云ふことに、氣付いたであらう。かくて彼は、通貨（の分量）が固定してゐるといふ彼れの獨斷は、言語道斷の誤謬であつて、吾々の日常見る變動と相容れざることに、氣がついたであらう。彼は、通貨の法則に關する彼れの誤解を轉じて勞賃の値上げに反對する議論となすことの代りに、かく絶えず變化しつゝある諸事情に對し通貨をして適應せしむるための法則を研究したであらう。

四、供給と需要[1]

我等の友人ウェストンは、ラテン語の repetitio est mater studiorum 卽ち反覆は研究の母といふ諺を奉じてゐる、そうして其のために彼は、彼れの最初の獨斷を重ねて新たな形式の下に繰り返し、勞賃增加のために生ずる通貨の縮少は資本の減少を齎すであらう云云と論じた。（しかし）通貨に關する彼れの奇妙な考は私の既に批評し了へたところだから、私は、彼が彼れの想像的な通貨上の難關に伴ふと彼れの考へてゐる想像上の結果にまで、茲で立ち入る必要は全くあるまいと思ふ。（だから）私は進んで、かくも樣々な形式で繰り返されてゐる彼れの全く同一な獨斷を、直ちにその最も單純な理論的形式に還元するであらう。

彼がこの問題を取り扱つた方法の無批判的なことは、一言で明かとなるであらう。彼は勞賃の値上げに對して、或は斯の如き値上げの結果たる高い勞賃に

1) ドイツ譯には『勞賃の尺度について』と題す。（譯者）

對して、抗論してゐる。さて、私は彼に問はう、高い勞賃とは何であり、低い勞賃とは何であるか？　何故例へば毎週五シリングでは低い勞賃となり、毎週二十シリングでは高い勞賃となるのか？　もし五シリングが二十シリングに較べて低いのなら、二十シリングは二百シリングに較ぶれば、なほさら低い。もし何人かが寒暖計について講義をする場合に、いきなり度が高いとか低いとか云ふことを辯じ立てたならば、彼は全く何等の知識をも與へることが出來ないであらう。彼は先づ我々に向つて、氷點は如何にして見出されるか、また沸騰點は如何にして見出されるかを述べ、かくて、如何にして此等の標準點が、寒暖計の賣手や製造人やの嗜好によつてではなく、種々の自然法則によつて決定せらるるものなるか、を述べねばならぬ。ところで勞賃および利潤に關して、ウェストン君は、曾に此の如き標準點を經濟法則から演繹し得なかつたのみならず、それを考究する必要をすら感じなかつたのである。彼は、高い低いといふ普通の俗語を何か一定した意味を有するものとして受け入れ、それで滿足してゐるのだが、しかし言ふまでもなく、勞賃は、その大さを測定するための或る標準と比較して、始めて高いとか低いとか云ひ得られるに過ぎぬのである。

彼は、何故或る一定量の貨幣が或る一定量の勞働に對して與へらるるかを、説明することが出來ないであらう。もし彼が『それは需要供給の法則によつて決定される』と答へるやうなことがあれば、私は直ぐさま彼に向つて、(それなら)需要供給それ自身は如何なる法則によつて規定されるかと質すであらう。さうすると、件の答は直ちに其の力を失ふであらう。(勿論)勞働の需要と供給との關係は絶ゑず變動してゐる、そうしてその變動に伴つて勞働の市場價格もまた絶ゑず變動してゐる。もし需要が供給を超せば勞賃は騰貴する、もし供給が需要を超せば勞賃は下落する、(尤も斯樣な事情の下では、例へば同盟罷業なり又はその他の方法によつて、需要供給の眞の狀態を驗めして見る必要があるかも

知れないが)。しかしもし諸君が需要供給をば勞賃決定の法則として認めるならば、躍氣となつて勞賃の値上げに反對するのは、無用でもあり兒戯に類するものでもあらう、何故ならば、諸君の援用するその最高法則(需要供給の法則)に從へば、勞賃の一時的騰貴はその一時的下落と同じやうに、全く必然的であり且つ當然なものであるから。(ところで)もし諸君が需要供給を勞賃決定の法則として認めないならば、私は再び件の質問を繰り返さう、何故或る一定量の貨幣が或る一定量の勞働に對して與へらるゝのであるか?

(斯樣に考へてくる時は、勞賃の決定を需要供給の法則で說明しやうといふ企は、全く行き詰まつて仕まふ)。しかし私は此の問題(需要供給の問題)を更により廣い見地から考究して見やう、もしも諸君が、勞働の、或はその他あらゆる商品の價値が、需要供給によつて終局的に決定せられる、と考へるならば、諸君は全く誤謬に陷るであらう。需要供給は市場價格の一時的動搖を規定するに過ぎない。それは諸君に向つて、何故ある商品の市場價格がその價値以上に上ぼり、或はそれ以下に下がるかを說明するであらうが、しかしその價値それ自身を明かにすることはできない。需要と供給とが平衡を保つ場合、または經濟學者の云ふやうに需要と供給とが一致する場合を想像せよ。かゝる場合には、此等反對の力が相等しくなつたその瞬間に、此等は相互に相手を無力ならしめて、一方の方向にも他方の方向にも働くことを止めて仕まふ。需要と供給とが相互に平衡を保ち、從てまた其の作用を中止したその瞬間に、商品の市場價格はその眞實の價値と、即ちその市場價格が之を中心として振動するところの標準價格と、一致するのである。だから、その價値なるものゝ性質を研究するに當つては、我々は、需要および供給の市場價格に及ぼす一時的影響には、何等の用をも有たぬのである。このことは、勞賃についても、また總ての他の商品の價格についても、同じことである。

五、勞賃と價格[1]

我等の友人（ウエストンを指す）の議論はすべて、これを最も單純なる理論的表現に還元すると、斯ういふ單一の獨斷となる、『商品の價格は勞賃により決定され或は規制される。』

この舊式な陳腐な謬論に對し其の然る所以を明かにするために、私は容易に實際的觀察に訴へることが出來る。私の諸君に告げ得ることは、その勞働の比較的に高價な（即ち勞賃の比較的に高い）イギリスの工場勞働者や、鑛夫や、造船工や、その他の者は、彼等の生産物の廉價な點では、却て他の總ての國民に優つてゐるが、それと同時に、例へばイギリスの農業勞働者のやうに、その勞働の比較的に廉價なものは、彼等の生産物の高價な點で、競爭上殆ど他の總ての國民に負けてゐる、といふことである。同一國内の物品と物品とを、そうしてまた異れる國々の諸商品を、互に較べて見れば解るやうに、數個の例外――眞實のといふよりは寧ろ外見上の例外――を除けば、平均して、高價な勞働は廉價な商品を、廉價な勞働は高價な商品を生産する。勿論これは、前の場合における勞働の高價と後の場合におけるその廉價とが、それ〴〵此等正反對の結果の原因であるといふことの證明にはなるまいが、しかし兎に角、諸商品の價格が勞働の價格によつて支配されてはゐないといふことの證明にはならう。けれども吾々にとつては、この實驗的方法を用ひるのは、全く餘分なことである。

ウエストン君が、『商品の價格は勞賃によつて決定され或は規制される』といふ獨斷論を立てたといふことは、恐らく、否定され得やう。事實の點では、彼は決して之を公式的に表はしてゐるのではない。それどころか、彼は、利潤および地代もまた商品の價格の構成部分を成す、何故なら、啻に勞働者の勞賃のみならず、資本家の利潤も、地主の地代も、商品の價格の中から支拂はれねばな

1) ドイツ譯には『勞賃および商品の價格』と題す。（譯者）

らぬから、と言つてゐる。しかし(それなら更に問ふことがあるが)、彼れの考では、價格は如何にして形成されると云ふのか？　(曰く、彼れの考によれば、それは)先づ第一に勞賃によつて。それから此の價格の上に、資本家のために或る追加歩合が加へられ、更に他の追加歩合が地主のために加へられる。(例へば)或る商品の生產に使用せらるゝ勞働の勞賃を十と假定しやう。もし利潤率が、放下された勞賃額に對して百パーセントであるとすれば、資本家は十を加へるであらうう、そうして地代の率もまた勞賃に對して百パーセントであるとすれば、更に十が加へられるであらう、かくて其の商品の價格は三十になるであらう。しかし斯樣にして價格を決定することは、單に勞賃のみによつて之を決定すると同じである。もしも上の例において勞賃が二十に騰貴したならば、その商品の價格は六十に騰貴する、かくてその他の場合も總て之に準ずるであらう。だから、勞賃が價格を規制するといふ獨斷論を唱へるところの、總ての老朽せる經濟學上の論者達は、利潤および地代をば勞賃に對する單なる追加歩合として取り扱ふことによつて、この獨斷論を證明せんと試みた。勿論彼等の中の何人も、此等歩合の限度をば、何等かの經濟法則に歸し得たものはなかつた。(何故此等の歩合が五十パーセントとか百パーセントとかに定まるかを、一定の經濟法則によつて說明し得たものは、一人もなかつた。)それどころか、彼等は、利潤は、因襲や、慣習や、資本家の意志やにより、或は何か同じやうな勝手な且つ說明すべからざる他の方法によつて、決定されるものと考へたやうである。假に彼等が利潤は資本家達の間の競爭によつて決着すると主張するとしても、それは全く說明にはならない。なるほど、その競爭は、種々な事業における種々な利潤率を平均し、其等の利潤率を一つの平均水準に歸一せしむるに相違ないが、しかし其れは、決して水準それ自身を、即ち一般利潤率を、決定し得るものではない。

商品の價格が勞賃によつて決定されるといふことは、窮極如何なる意味に歸

するか？　勞賃とは勞働の價格に附した名稱に過ぎないから、それは、商品の價格は勞働の價格によつて規制されるといふ意味になる。『價格』とは交換價値であり、――私が價値といふのは、いつも交換價値のことである[2]――貨幣で言ひ表はされた交換價値であるから、件の命題は畢竟こういふことになる、『商品の價値は勞働の價値によつて決定される』、或は、『勞働の價値は價値の一般的尺度である。』

しかし、さうだとすると、『勞働の價値』それ自身は如何にして決定せられるか？　こゝで我々は確と行き詰つて仕まふ。勿論、それは我々が論理的推理をしやうとするから行き詰るのである。しかしこの説の主張者は、論理上の躊躇をなすことなく、之を手輕に片づけてゐる。例へば、我等の友人ウェストンの場合を取つて見よ。先づ彼は吾々に説くに、勞賃は商品の價格を規制すると云ふこと、從て勞賃が騰貴すれば物價も騰貴しなければならぬと云ふこと、を以

2)『資本論』では交換價値は價値の表現形態であるとされてゐる。（譯者）

てする。それから次に彼は向き直つて、勞賃の値上げをしても何の役にも立たない、何故なら、（勞賃が値上げされた以上）諸商品の價格は已に騰貴してゐるし、さうして勞賃（の高低）は、實は、その勞賃が之が購買のために費される諸商品の價格によつて測定されるものだから、と説く。かくて吾々は、勞働の價値は商品の價値を決定するといふことから出發して、商品の價値は勞働の價値を決定するといふことに到達する。斯樣にして吾々は、最も誤れる循環論の中を行つたり來たりして、結局何等の結論にも到達しないのである。

要するに全體から見て明瞭なことは、一つの商品の價値、例へば勞働なり、穀物なり、その他何等かの商品の價値を、價値の一般的な尺度および規制者としたのでは、我々は一つの價値をば他の價値――其れはまた其れとして決定さるゝことを必要とするもの――で決定するのだから、畢竟吾々は、單に難關の所在を移したに過ぎぬと云ふことである。

『勞賃は商品の價格を決定する』といふ獨斷は、これを最も抽象的の形で言ひ表はせば、『價値は價値によつて決定される』といふことに歸する、そうして此の同義反覆（トートロヂー）は、實に、吾々が價値に關して全然何んにも知らないと云ふことを意味する。もし此の前提を認めるならば、經濟學の一般的諸法則に關する總ての推理は、單なる無駄話となつて仕まふ。それゆへ、リカアドが一八一七年に公にした彼れの『經濟學原理』において、『勞賃は價格を決定する』といふ此の古い、通俗な、使ひふるされた謬見を、――アダム・スミスおよびフランスにおける彼れの先行者達は、彼等の研究の眞に科學的なる部分においてこそ之を排斥してゐるが、しかしより平易にして通俗なる諸章においては、再び之を持ち出してゐるところの、その謬見を、――根本的に打破して仕まつたのは、彼れの偉大なる功績である。

六、價値と勞働[1]

諸君、私は今、この問題の眞實の展開に入らねばならぬと云ふ點に達した。（しかし）私は十分滿足の出來るやうに之を仕遂げると約束することは出來ぬ、何故といふに、さう仕やうがためには、私は經濟學の全局面に亘ることを餘儀なくされるであらうから。私は只、フランス人が言ふやうに、effleurer la question 卽ち主要點に觸れ得るだけだ。

吾々の提出すべき第一問題は、商品の價値とは何か？　如何にして其れが決定せられるか？　である。

一見すると、一つの商品の價値は全然相對的のものであつて、一つの商品をば其のものが總ての他の商品に對して有する關係において考へなければ、決定することの出來ぬものゝやうに見えるだらう。實際において、吾々が一つの商

1) ドイツの譯本は『價値および價格について』と題する。（譯者）

品の價値、その交換價値といふ時には、吾々は其の物が總ての他の商品と交換せらるゝところの比例的分量を意味する。しかし、さうだとすると、こういふ問題が起る、商品が相互に交換せらるゝところの其の比例は、如何にして規制せられるか？

吾々は經驗からして、此等の比例は限りなく變動することを知つてゐる。假りに或る一個の商品、例へば小麥を取つて見るのに、吾々は一クォータアの小麥が種々なる商品と殆ど無數の違つた比例において交換されることを發見する。しかし、たとひ絹布や金やその他の如何なる商品で表現されやうとも、その價値は依然としていつも同じであるから、それは種々なる物品に對する此等種々なる交換率より何か別のもので、それから獨立したものでなくてはならぬ。種々なる商品に對する此等種々なる方程式を、一つの甚だしく違つた形態で表現することが、可能でなければならぬ筈だ。

しかのみならず、もし私が、小麥一クォータアは一定の比において鐵と交換されるとか、または小麥一クォータアの價値は鐵の一定量において表現されるとか言つたならば、それは私が、小麥の價値と鐵に含まれてゐる其の等價とは、小麥にも鐵にもあらざる何かの第三者に等しいと言つた譯になる、何故なれば、私は（爾か言ふことにおいて）、此等の物が二つの違つた形において同一の大さのものを表現すると假定してゐるから。だから此等の各〻は、小麥にせよ鐵にせよ、他方のものからは獨立して、彼等の共通の尺度であるところの此の第三者に還元されなければならぬ。

私は此の點を説明するために、極く簡單な幾何學上の例について考へて見やう。あらゆる總ての形態および大さを有する三角形の面積を比較し、または三角形をば長方形或は其の他のどんな直線形でもと比較するといふ場合に、吾々は何う處置するか？　吾々は、どんな三角形であつても其の面積をば、その外

見的形態とは全く違つた或る表現に還元する。吾々は三角形の性質からして、之が面積はその底邊と高さとの積の半分に等しいことを發見し、かくて吾々は、總ての種類の三角形の種々なる價値を比較し得るのみならず、また有らゆる種類の總ての長方形の種々なる價値をも比較することが出來る、何故といふに、此等の長方形は何れも一定の數の三角形に分解し得らるゝものだから。

諸商品の價値についても同じ仕方が行はれねばならぬ。吾々は諸商品の價値の總てをば總てに共通な或る表現に還元することが出來、さうして只、此等のものが此の同一の尺度を包含する比によつてのみ、此等のものを分別することが出來るのでなければならぬ。

諸商品の交換價値はただ此等の物(諸商品)の社會的機能に過ぎぬのであつて、これが自然的性質とは全然何等の關係を有たぬのであるから、吾々は先づ、總ての商品に共通な社會的の實體は何か？　といふことを尋ねなければならぬ。

それは勞働である。一つの商品を生産するためには、一定量の勞働が其の上に加へられ、または其れに費されねばならぬ。さうして其れは實に、ただ勞働ではなくて、社會的勞働だ。彼れ自身の直接の使用のために、即ち自分自身が其れを消費するために、或る品物を生産する人は、一個の生産物を作り出すだけで、一個の商品を作り出すのでは無い。一個自給の生産者として彼は社會と全く沒交渉である。しかるに、商品を生産すると云ふことになれば、人は當に或る社會的の欲望を滿たす品物を生産するばかりでなく、彼れの勞働そのものが社會によりて費された勞働總額の一部を成し一分を成してゐなければならない。(即ち)それは社會内における分業に從屬しなければならない。それは他人の分業がなければ始めから成り立たぬものであり、また自分の方からは他人の分業を補充して行かなければならぬものである。

吾々が商品を價値として考へる場合には、吾々は此等のものをば專ら、實體

化された、固定された、或は言はゞ、結晶された社會的勞働といふ單一の觀點の下においてのみ觀察する。この觀點からすれば、此等の商品はたゞ勞働の多いまたは少い分量を代表してゐると云ふことだけで區別され得るので、例へば、絹のハンケチには煉化石によりも餘計な分量の勞働が費されてあると云ふの類である。それなら何うして勞働の分量を測るのか？　それは勞働の續く時間によつて、即ち勞働をば、時、日等で測るのである。勿論、この尺度を當嵌めるについては、總ての種類の勞働は、その單位たるべき平均勞働または單純勞働に還元されるのである。

そこで吾々は斯ういふ結論に達する。一つの商品が或る價値を有するのは、それが社會的勞働の結晶であるからだ。その價値の大さ、即ちその相對的價値は、その中に含まれてゐる斯かる社會的實體の分量の大小に、言ひ換ふれば、その生産に必要な勞働の相對的分量に、依存するものだ。だから、諸商品の相對的價値は、其等の商品に費され、實體化され、固定された勞働のそれ〴〵の量または高によつて決定される。同一の勞働時間を以て生産され得るところの諸商品のそれ〴〵の分量は、（價値において）相等しい。或はまた、一の商品の價値が他の商品の價値に對する關係は、前者に固定された勞働の分量が後者に固定された勞働の分量に對する關係である。

思ふに諸君の多數は質問せらるゝだらう、しからば、商品の價値を勞賃（その商品を生産するために費された勞働に對する報酬）によつて決定するのと、これが生産に必要な勞働の相對的分量によつて決定するのと、その間に果して、さまで大なる、または概して何等かの、差異が存するのであるかと。ところが諸君の注意を請はなければならぬのは、勞働に對する報酬と、勞働の分量とは、全く別物だと云ふことである。例へば、一クォータアの小麥と一オンスの金とに同量の勞働が固定されてゐると假定する。私がこの例を取るのは、それが一七二一年[2]

2)私の用ひた底本(例言參照)には1729年としてあるが、それは恐らく誤植だらうと思ふ。(譯者)

に公にされたベンジャミン・フランクリンの最初の論文に用ひられてあるからだ、その著述は A Modest Enquiry into the Nature and Necessity of a Paper Currency（紙幣の性質および必要に關する一小研究）と題するもので、書中彼は、先鞭をつけた者の一人として、價値の眞性質に觸れてゐるのである。さて、吾々は、一クォータアの小麥と一オンスの金とは、其等の物にそれ〳〵固定されてゐる何日分か何週分かの、平均勞働の同じ分量の結晶であるがために、此等の物は同一の價値または等價物であると假定する。かやうにして金と穀物との相對價値を決定するに際して、吾々は農業勞働者および鑛夫の勞賃につき幾分でも何等か顧みる所があるかと云ふに、それは毫もない。吾々は、如何に彼等の一日分又は一週間分の勞働が支拂はれるかと云ふこと、または總じて賃勞働[3]が使用されたか何うかと云ふことさへ、全く不問に附する。もし賃勞働が使用されたにしても、勞賃は甚しく不同であつたかも知れない。その勞働を小麥一

3) Lohnarbeit 又は wages labour の譯。勞賃（賃銀）を支拂つて使用する勞働といふ意味。

クォータアに實體化した勞働者は、僅に二ブッシェル（一クォータアは八ブッシェルにて、一ブッシェルは二斗一合餘）を得てゐるに、鑛業に使用された勞働者は、金半オンスを得てゐることもあり得る。或はまた、彼等の勞賃は同じことだとしても、彼等の生產した商品の價値からは、樣々の有らゆる比例において背離し得る。それは穀物一クォータアまたは金一オンスの二分の一、三分の一、四分の一、五分の一、または其の他の如何なる分數でもあり得る。勿論、彼等の勞賃が、彼等の生產した商品の價値を超過し、それより多くなるといふことはあり得ぬが、しかし有らゆる可能な程度において其れより少くはあり得る。彼等の勞賃は生產物の價値によつて制限されるが、しかし彼等の生產物の價値は勞賃によつて制限されはしないであらう。何はさておき、要するに、價値、例へば穀物と金との相對的價値なるものは、使用せらるゝ勞働の價値には、卽ち勞賃には、總じて何等の關係なくして決定せられてゐるであらう。だから、諸商品の價値を

ば其等のものに固定された勞働の相對的分量で決定するといふことは、諸商品の價値をば勞働の價値卽ち勞賃で決定するといふ同義反覆の說明法[4]とは、全然別種の事柄である。しかし此の點は、吾々の研究が進むに從つて、なほ委しく闡明せらるゝであらう。

商品の交換價値を計算するに當つては、吾々は最後に用ひられた勞働の分量に加ふるに、商品の原料の上に以前費された勞働の分量と、かゝる勞働を助くるための器具、道具、機械、および建物に賦與された勞働と、を以てしなければならぬ。例へば木綿絲の一定量の價値は、紡績作業の行程中に綿花に加へられた勞働の分量、綿花そのものゝ上に以前實體化された勞働の分量、石炭や油やその他の使用せらるゝ助成材料に實體化された勞働の分量、蒸氣機關や紡錘や工場用建物やその他のものに固定された勞働の分量等の結晶物である。固有の意味における生產用具[5]、例へば道具や機械や建物は、或は長き或は短き期

4)第五節『勞賃と價格』の終りの部分參照。(譯者)
5)Instruments of production の譯。この英語は、之を廣義に用ふれば、原料、助成材料等をもそのうちに含む。(譯者)

間、繰り返さるゝ(何回もの)生產行程に亘り、再三再四使用せられる。もし此等のものが原料のやうに直ちに消耗せられるならば、その全價値は、此等のものが其の生產を助けた諸商品の上に、直ちに移轉さるゝであらう。けれども、例へば紡錘の如きは、段々にしか消耗しないものだから、その持續する平均時間と、一定の期間例へば一日の間における其の平均の消耗または磨損とを基礎として、平均の計算が立てられる。かやうにして吾々は、紡錘の價値のうち何れだけが日每に紡がれる絲に移轉し、從てまた、例へば一封度の絲に實體化される勞働の總量の中で、何れだけが、以前紡錘に實體化された勞働の分量に歸するかを、計算することができる。吾々の現在の目的に對しては、この點に關し、最早やこれ以上縷說する必要はない。

商品の價値がもし其の生產のために賦與された勞働の分量で決定されると云ふことであれば、人が怠惰であればあるだけ、また人が不器用であればあるだ

け、その商品を仕上げるに餘計の勞働時間を要するから、その者の商品は一層價値あるものゝ如く考へられるかも知れない。しかし其れは大變な間違だ。諸君は私が『社會的勞働』といふ語を使つたことを記憶せらるゝだらう、さうして此の『社會的』といふ形容詞のうちには多くの要點が含まれてある。商品の價値は其れに費された又は其れに結晶された勞働の分量によつて決定されるといふ時、吾々は、與へられたる社會狀態において、一定の社會的平均の生産條件の下において、使用せらるゝ勞働の與へられたる社會的平均の集約度と熟練とを以てして、その生産に必要な勞働の分量を意味する。イギリスにおいて機力機が手織機と競爭するやうになつてからは、一定量の絲を一ヤアドの綿布にするのに、以前の勞働の半分しか要らなくなつた。そこで憐れなる手織機業者は、以前は一日に九時間乃至十時間しか働いてゐなかつたのに、今は一日に十七時間乃至十八時間働くやうになつた。けれども二十時間分の彼れの勞働の生産物は、今では社會的勞働の僅に十時間分を、言ひ換ふれば、一定量の絲を織物にするため社會的に必要な勞働の十時間分を、代表するに過ぎない。だから、二十時間に亘る彼れの生産物は、以前彼が十時間かけて仕上げた生産物の價値しか無くなつた。

さて諸商品に實體化されたところの社會的に必要な勞働の分量が、其等商品の交換價値を規制すると云ふことであれば、一つの商品の生産に要せらるゝ勞働の分量が增す毎に、その價値は高まり、減ずる毎に、その價値は低くなる筈である。

もし種々の商品の生産に必要とせらるゝ其れ〳〵の勞働量が何時も不變であるならば、此等の物の相對價値も亦た不變であるべきだ。しかし實際には斯樣なことは起らぬ。一商品の生産に必要な勞働の分量は、使用せらるゝ勞働の生産力における變化と共に、絶ゑず變化する。勞働の生産力が大であればあるだ

け、勞働の一定時間内により多くの生產物が仕上げられ、勞働の生產力が小であればあるだけ、同じ時間内により僅かの生產物が仕上げられる。例へば、人口の增加に伴うて痩せた土地を耕作することが必要になつて來たならば、同じ高の生產物が、より多くの勞働量を費していなければ得られなくなり、從て農產物の價値は騰貴するだらう。之に反し、近代の生產手段を以て、もし一人の紡手が一日の勞働日の内に、手紡車で同じ時間内に紡ぎ得たであらう所の綿花量の數千倍を絲にして仕まふならば、綿花の各一ポンドづゝは、以前に比べて、絲紡ぎの勞働の數千分の一しか吸收しないことが明かだ、さうしてその結果、紡績作業によりて綿花の各一ポンド毎に加へらるゝ價値は、以前に比べて數千分の一にしか足らぬ譯だ。(かくて)絲の價値も之に應じて下落するであらう。

しばらく種々なる人々の先天的の精力および後天的の勞働能力の差異を含くならば、勞働の生產力は主として次の事情に依存する筈だ。

第一。勞働の自然的條件に、例へば、土地や鑛山やその他の豐饒度の如き。

第二。社會的勞働力の進みゆく改善に、例へば、大規模の生產、資本の集中および勞働の結合、分業、機械、改良されたる諸方法、化學的およびその他の自然的作因の應用、通信運搬の諸機關による時および所の縮少、ならびに科學の力により自然力を驅つて勞働の用をなさしめ、また之によつて勞働の社會的或は協力的性質を發達せしむるところの、その他の一切の設備、凡そ此等のものから得らるゝところの社會的勞働力の改善。勞働の生產力が大なれば大なるほど、より僅かな勞働が生產物の一定量に費され、從て生產物の價値は小さくなる。勞働の生產力が小なれば小なるほど、より多くの勞働が生產物の同じ分量に費され、從て其の價値は大きくなる。だから、吾々は一般的法則として、次の事を定立し得る。——

諸商品の價値は、これが生產に使用せられた勞働時間に正比例し、また使用

せられた勞働の生産力に逆比例する。

私はこれまで只だ價値のことのみ言つて來たが、更に價格について數言を加へねばならぬ、これは價値の取る一の特殊形態なのだ。

價格は、それ自身を取つて見れば、たゞ價値の貨幣的表現たるに過ぎない。例へば、この國（イギリス）における總ての商品の價値は金價格で表現されてゐるが、大陸では主として銀價格で表現されてゐる。[6] （今）金または銀の價値は、總ての他の諸商品のそれと同じく、これを得るために必要なる勞働の分量によつて規制せられる。吾々は吾々の國民勞働の一定量が結晶されてゐるところの、吾々の國民生産物の一定量をば、金銀産出國の國民の勞働の一定量が結晶されてゐるところの、其等の國々の生産物と交換する。此の如き方法により、即ち事實は物々交換により、吾々は、總ての商品の價値、即ち其等のものに費された勞働のそれ〳〵の分量をば、金および銀で現すやうになる。吾々がこの價値

6)當時ではイギリスだけが金本位制を採つてゐたのだ。（譯者）

の貨幣的表現、言ひ換ふれば、價値の價格への轉換について、稍〻精確に之を考察するならば、それは吾々が、總ての諸商品の價値に一の獨立せる且つ同質なる形態を賦與するための、或は同等なる社會的勞働の或る分量として之を表現するための、一過程だといふことを發見するだらう。價格は、それが價値の貨幣的表現に過ぎざる限りにおいては、アダム・スミスによつは natural price（自然價格）と呼ばれ、フランスのフィジオクラッツ（重農學者）によつては prix nécessaire（必要價格）と呼ばれたものである。

しからば、價値と市場價格との關係、または自然價格と市場價格との關係は何うであるか？ 諸君の知らるゝ如く、商品の生産條件は個々の生産者にとつて如何に相違してゐやうとも、市場價格は同じ種類の總ての商品に向つて皆な一樣である。市場價格は、生産の平均條件の下において、一定の貨物の一定量を市場に供給するために、必要とせらるゝ社會的勞働の平均量を表現するに過

ぎない。それは、一定の種類の商品の全體によつて計算せられる。

然るかぎりにおいて一の商品の市場價格は其の價値と一致する。他方において、市場價格の震動——それは今まで價値または自然價格の上に上ぼつてゐたかと思へば、今は又それ以下に下がる——は、需要および供給の動搖に依存する。(だから)市場價格の價値からの背離は繼續的である、けれどもアダム・スミスの言ふやうに、「自然價格は諸商品の價格が絶えず其れに引かれてゐるところの中心價格だ。種々なる偶發事は、時として市場價格をば自然價格の遙に上に留まらしめ、時としては幾分それ以下にさへ推し下げる。しかし如何樣の障碍があつて市場價格をば休息および滯留の此の中心に安定することから妨げやうとも、市場價格は不斷に之に向つて傾向しつゝある。」

私は今この點を委しく述べることはできぬ。只もし需要と供給とが相互に平衡するならば、諸商品の市場價格は、これが生產のため要せらるゝ勞働の其れ

ぞれの分量によつて決定せられるところの、其等のものゝ自然價格、即ち其等のものゝ價値と一致するであらう、といふことを言へば足りる。ところが需要と供給とは絶ゑず互に平衡する傾向を有たねばならぬものだ、尤もそれは一の動搖は他の動搖により、即ち騰貴は下落により(價格が騰貴し過ぎて供給が需要に超過すれば、次ぎには價格が下落すると云ふことにより)、また下落は騰貴によつて(價格が下落し過ぎて需要が供給に超過すれば、次ぎには價格が騰貴すると云ふことによつて)塡補されることによるの外はないのだが。もしも諸君が、單に日々の動搖を觀察する代りに、例へばトゥーク氏がその著 History of Prices (物價史)でしたやうに、長期に亘つて市場價格の動きを研究したならば、市場價格の波動、その價値からの背離は、一上一下、互に相殺し塡補するものであり、從て獨占およびその他若干の制限(modification)の作用——今私は此等の問題に立ち入ることはできぬが——を除外するならば、總ての種類の商品は、平均して、それ〳〵の價値または自然

価格を以て賣られるものだ、といふことを發見するであらう。市場價格の動搖が相互に塡補するに至る平均期間は、商品の種類を異にするによつて異る、それは或る種類の商品にあつては他の商品におけるよりも、供給を需要に適合することが一層容易であるからだ。

さて、廣く觀察し且つ稍〻長き期間を包含すれば、總ての種類の商品は其れ〳〵の價値において賣られるのであるが、もしさうだとすれば、かの利潤なるものが、――それは個々の場合の利潤でなく、種々なる事業から生ずる恒常的且つ一般的の利潤が、――諸商品の價格から、卽ち諸商品をば其の價値以上の價格で賣ることから、發生するものだと考へるのは、ノンセンスである。この考の無稽なことは、之を一般化して見ると明かだ。或人が賣手として絕えず得てゐるものは、買手として絕えず損してゐなければならぬ。（賣る時には價値以上の價格で賣るから得をするだらうが、物を賣るばかりで何も買はないと云ふ譯には行かぬから、一方で物を賣ると同時に、他方では物を買ふ譯だが、既に物を買ふとなれば、矢張り價値以上の價格で買ふのだから、賣つた時に儲けた利得は、買ふ時に皆な無くして仕まひ、前後差引き何等の餘分も殘らぬ譯だ）。（それかと言つて）、賣手になることの無い買手、生產者になることの無い消費者がある、と言つたところが、それは駄目だ。此等の人々が生產者に支拂ふ所のものは、彼等が最初生產者から無償で得來つたものでなければならぬ。（しかるに）もし誰かゞ先づ吾々の金を取り上げておいて、さうして後から其の金で吾々の商品を買ふのなら、吾々は其の人に吾々の商品をいくら高く賣つたとて、それで金持になれる筈はない。かやうな種類の取引は損失を輕減することは出來ても、決して利潤を產み出す助けにはならぬ筈だ。

だから利潤の一般的性質を說明するに當つては、吾々は、斯ういふ理論――卽ち商品は平均して言へば其の眞實の價値において賣られるものであり、さうして利潤は此等の商品を其の價値において、言ひ換ふれば、之に實體化された

勞働の分量に比例して、賣ることにより獲得せらるゝものだ、といふ理論——から出發しなければならぬ。もし吾々が此の前提の下に利潤を説明することが出來なければ、吾々は一般に之を説明することが出來ぬのだ。これはパラドックスであり、日常の觀察に反してゐるやうに見ゐる。しかし地球が太陽の周りを廻つてゐると云ふのも、また水が最も燃ゐ易い二種の瓦斯から成り立つてゐると云ふのも、等しくパラドックスだ。科學上の眞理は、單に事物の迷はし易き外觀をのみ捉へるところの、日常の經驗から判斷したならば、何時でもパラドックスのものである。

七、勞働力[1]

さて吾々は、このやうな早急な方法で爲し得る限りにおいて、既に價値の性質、あらゆる種類の商品の價値の性質を研究し了へたからして、吾々は是れから吾々の注意をば、勞働の價値といふ特殊の價値に向けなければならぬ。さうして茲でも復た私は一見パラドックスに似たことを言つて、諸君を驚かさなければならない。諸君の總ては、諸君が日々賣る所のものは諸君の勞働だといふこと、從て勞働は一の價格を有すといふこと、また一商品の價格といふのは其のものゝ價値の貨幣的表現なのだから、(勞働についても)必ず勞働の價値といふやうなものが無ければならぬといふことを、信ぜられるであらう。けれども、その(勞働の價値といふ)言葉の普通の意味においては、勞働の價値といふやうなものは全く存在しない。既に述べたやうに、一の商品に結晶された必要勞働の高

1)『資本論』の英譯には labour power としてあるが、茲では labouring power なる文字が用ひてある。(譯者)

が、そのものゝ價値を構成するのだが、今こういふ價値の概念を適用して、例へば十時間の勞働日の價値を、何うして決め得るか？　その日の中に何れだけの分量の勞働が含まれてゐるか？　それは十時間の勞働だ。（しかし）十時間の勞働日の價値が、十時間の勞働、または其のうちに含まれてゐる勞働の分量に、等しいと云ふのは、同義反覆の、且つまた、無意味の言ひ表しである。勿論、一たび吾々が「勞働の價値」といふ言ひ表しの眞實なる、しかし隱れたる意味を見出すならば、吾々が此の不合理なる、且つ外見上不可能なる價値（概念）の適用を説明し得ることは、恰も一たび天體の眞實の運動を確めると、吾々が此等天體の外觀上の運動、または單に現象的なる運動を説明し得るに至ると、同じであらう。

勞働者が賣るところのものは、直接に彼れの勞働ではなくて、彼れの勞働力なのだ、その勞働力の處分を一時彼は資本家に委ねるのだ。これが實際の事實

だといふことは、――英國の法制では何うなつてゐるか知らぬが、確に大陸の或る國々の法制で、――人がその勞働力を賣り得る最長時間が規定されてあるのを見ても能く分かる。もし勞働力を賣ることが、いくらでも無期限に許されたならば、奴隷制がすぐ復活することになる。もし此の如き勞働力の賣却が、假に人の一生に亘るとするならば、その人は直ちに彼れの雇主の生涯の奴隷となるであらう。

英國の最も古い經濟學者でまた最も創始的な哲學者の一人――トマス・ホッブス――は、既にその著 Laviathan において、直覺的に此の點に觸れてゐるが、それは彼れの總ての後繼者によつて看過されて仕まつた。彼は曰ふ、「人の價値または値打（the value or worth of a man）は、總ての他の物におけると同じく、彼れの價格、即ち彼れの力の使用に對して提供せらるゝ所のものである。」

この基礎から出て行つたならば、吾々は總ての他の商品の價値と同じやうに、勞働の價値を決定することが出來るであらう。

しかし其れより前に、吾々は次のことを疑問となし得やう、市場には土地や機械や原料や生活資料やを有つてゐる(勞働力の)買手の一組がゐて、此等の人々の有つてゐる物は、原始狀態に於ける土地を除けば、總て勞働の生產物であるのに、他方には(勞働力の)賣手の一組がゐて、其等の人々は彼等の勞働力、卽ち勞働を爲し得るための腕と頭との外、賣るべき何物をも有つてゐないと云ふ此の奇怪な現象は、何うして起たのだ？　一方の組は利潤を得且つ自ら富むために絕ゑず(勞働力を)買つて居り、他方の組は彼等の生活資料を得るがために絕ゑず(勞働力を)賣つて居ると云ふ此の奇怪な現象は、何うして起つたのだ？　此の問題の研究は、(つまり)經濟學者が「一次的の又は本原的の蓄積」[2]と稱するもの、しかし正しくは「本原的の沒收」[3]と稱すべきものゝ研究になる。(さうして此の問題を研究したならば)、吾々は、この謂ゆる本原的蓄積なるものは、元と勞働する人と其の者の勞働手段との間に存在してゐた本原的結合の分解を齎すところの、歷史的過程の一系列を意味するに外ならぬことを、發見するであらう。しかし斯かる研究は、私が只今問題とするところの範圍外に橫はつてゐる。(だから、それについて委しくは述べぬが、ともかく)一たび勞働する人と勞働手段との間における分離が樹立されたならば、かゝる事態はそれ自身を維持し、且つ絕ゑず遞增的の規模においてそれ自身を複生產し、かくて遂には、生產方法における一の新たなる且つ根本的なる革命が再びそれを轉覆し、一の新たなる歷史的形態において本原の結合を恢復するに至るまでは已まない。

ところで勞働力の價値とは何であるか？

一切の他の商品と同じやうに、勞働力の價値も之を生產するに必要な勞働の分量によつて決定せられる。人間の勞働力は只彼れの生ける個體の中にのみ存

2)previous or original accumulation, erste oder ursprüngliche Akkumulation.

3)original expropriation, ursprüngliche Enteignung.

する。（さうして）人間が成長し且つその生命を維持するためには、彼によつて生活必要品の一定量が消費されなければならぬ。しかるに人間は機械と同じやうに消耗する、さうして更に他の人間によつて補充されなければならぬ。だから彼は、彼れ自身の維持に要する生活必要品の分量の外に、一定數の小供――勞働市場において彼に代位し、かくて勞働者といふ人種を永續さすためのもの――を育て上げるため、更に生活必要品の他の分量を必要とする。それのみならず、彼れの勞働力を發達させ、一定の熟練を習得するためには、價値の他の分量が費されなければならぬ。尤も吾々の目的に向つては單に平均勞働を考慮すれば足りる、さうして此等のもの丶（普通勞働者の）敎育と啓發とに要する費用は（今日）段々その額を減じつ丶ある。（だから此の點はさして重きを置かなくても可いが）しかし此の機會を捉へて述べて置かなければならぬのは、異れる質の勞働力を生產する費用は同じでないから、從て種々の事業に使用せらる丶勞働力の價値も

（亦た）相違しなければならぬと云ふことだ。だから、勞賃の平等を要求する叫聲は、一の謬想に本づくもので、それは到底實現され得ざる無稽の願望だ。それは前提を受入れて而かも結論を避けんとする、かの謬れる且つ淺薄なる急進論の所產である。勞賃制度の基礎の上では、勞働力の價値は一切の他の商品の其れの如くに決定される、さうして異れる種類の勞働力は異れる價値を有するが故に、即ち其等の生產に異なれる分量の勞働を必要とするが故に、其等のものは勞働市場において異れる價格を附せられなければならぬ。勞賃制度の基礎の上に立つて平等の報償を要求するのは、――或は單に公平の報償を要求するのさへ、――それは奴隷制度の基礎の上に立つて自由を要求すると同じである。諸君が正義とか公平とか考へてゐる事柄は問題外だ。問題は、一定の生產制度の下には如何なることが必然であり不可避であるかに在る。

以上述ぶる所によつて見れば、勞働力の價値は、勞働力を生產し、發達せし

め、維持し、且つ永續せしむるに要するところの、生活必要品の價値によつて定まるものなることが、分かるであらう。

八、剰餘價値[1]の生産

今一人の勞働者の日々の生活必要品の平均量は、その生産のため平均勞働の六時間を要するものと假定する。なほ平均勞働の六時間は、更に三シリングに等しき或る分量の金に實體化されるものと假定する。さうすれば、三シリングは、その人の勞働力の日々の價値の貨幣的表現、即ち價格であらう。もし彼が日々六時間働くならば、彼は、彼れの日々の生活必要品の平均量を買ふため、言ひ換ふれば勞働者として彼れ自身を維持するため、十分なだけの價値を日々生産することになるであらう。

ところが吾々が問題としてる人間は賃勞働者だ。だから彼はその勞働力を資本家に賣らねばならぬ。(さうして)もし彼がそれを一日三シリング、または一週十八シリングに賣るならば、彼は其れを其の價値において賣つた譯だ。(今)彼

1)surplus value, Mehrwert.

をば一個の紡績工だと假定する。(然る時)もし彼にして日々六時間働くならば、彼は綿花に對し日々三シリングづゝの價値を加へて行くだらう。彼によつて日々加へられるところの此の價値は、彼が日々受取るところの勞賃または彼れの勞働力の價格と全く等價であるであらう。しかし其の場合には、何等の剩餘價値または剩餘生産物も全然資本家に歸しないことになる。そこで吾々は茲では、たゞ困らなければならぬ。(剩餘價値が何うして出て來るかと云ふ問題を研究しやうとしてゐるのに、その剩餘價値が出ないことになるから、それで斯う云ふのである)。

資本家は、勞働者の勞働力を買ひ入れ、その價値を支拂つて仕まへば、一切の他の(商品の)購買者と同じやうに、その買ひ入れた商品を消費しまたは使用する權利を得る。彼は機械を運轉せしむることによつて之を消費しまたは使用するが如く、勞働者を働かしむることによつて其の者の勞働力を消費しまたは使用する。だから資本家は、勞働者の勞働力の一日分または一週間分の價値を買取ることによつて、全日または全週に亘つて其の勞働力を使用しまたは之を働かしむる權利を得るのだ。勿論勞働日(一日の勞働時間)または勞働週(一週間の就業日)には一定の制限がある、しかし此の事は後に至つてもつと委しく考察するであらう。

差當つて私は諸君の注意を一個の決定點に向けんことを要する。

勞働力の價値は之を維持しまたは複生産するに必要な勞働の分量によつて決定される、しかるに此の勞働力の使用はただ勞働者の精力および體力によつて制限されてるのみだ。勞働力の日毎または週毎の價値が、その力の日毎または週毎の發揮と、全然別物だと云ふことは、一匹の馬の要する飼料と、その馬が騎手を乘せて走り得る時間とが、全然別物なのと同じである。勞働者の勞働力の價値を限定するところの勞働の分量は、決して彼れの勞働力が執行し得る勞働の分量の限界となるものではない。再び紡績工の例を取つて見よ。既に述べ

3)capitalist production.
4)wages system.

たやうに、日々彼れの勞働力を複生産するためには、彼は日々三シリングの價値を複生産しなければならぬので、それは彼が日々六時間づゝ働くことによつて爲し得られる。しかしながら此の事は、彼が一日十時間または十二時間または更により多くの時間を働くことから、彼を妨げる譯ではない。ところが資本家は紡績工の勞働力の一日分または一週間分の價値を支拂ふことによつて、その勞働力をば全日または全週に亘つて使用するの權利を得る。だから彼は、勞働者をして例へば日々十二時間働かすことにする。そこで勞働者は、彼れの勞賃を、または彼れの勞働力の價値を、恢復するに要する六時間の上を超ゑて、更に他の六時間を働くことになるが、私はこれをば、剩餘勞働[2]の時間と名づけるであらう、さうして其の剩餘勞働が實體化して剩餘價値となり剩餘生産物となると言ふのである。もし吾々の例に取つた紡績工が、例へば、日々六時間の彼れの勞働によつて、丁度彼れの勞賃に等しいだけの價値、卽ち三シリングの

2)surplus labour, Mehrarbeit.

價値を綿花に加へるとするならば、彼は十二時間の內には、綿花に對し六シリングの値打を加へ、またそれに比例するだけの剩餘の絲を生産する譯になる。(ところが)彼は既に彼れの勞働力を資本家に賣つてゐるのだから、彼によつて産出された全價値または全生産物は、彼れの勞働力の一時的所有者たる資本家の手に歸して仕まふ。かくて資本家は三シリングを出資することにより六シリングを回收するであらう、何故ならば、彼は六時間分の勞働が結晶されてゐる價値を出資し、その代りに十二時間分の勞働が結晶されてゐる價値を回收するであらうから。これと同じ過程を日々繰り返すことによつて、資本家は日々三シリングを出資しながら日々六シリングを收める、さうして其の六シリングの半分は再び勞賃の支拂のために出て行くが、殘りの半分は、資本家が之に向つて何等の對價を支拂はぬところの、剩餘價値を形成するであらう。資本と勞働との間における此の種の交換こそ、資本主義的生産[3]または勞賃制度[4]が據つて以て

立てる基礎であり、且つ其れは、勞働者を勞働者として、また資本家を資本家として、絶ねず複生産するの結果を齎すべきものである。

總ての他の事情にして同一なりとすれば、剰餘價値の率は、勞働日（一日の勞働時間）のうち、勞働力の價値を複生産するに必要な部分と、資本家のために行はるゝ剰餘時間または剰餘勞働と、の間における比に依存するであらう。即ち其れは、勞働者が其の勞働によつて彼れの勞働力の價値を複生産し又は彼れの勞賃を回復すべきだけの範圍を超ねて、それ以上に勞働日（一日の勞働時間）の引き延ばされる比に依存するであらう。

九、勞働の價値[1]

吾々は今『勞働の價値または價格』といふ言葉に立ち還らねばならぬ。

既に述べたやうに、勞働の價値または價格とは、事實、勞働力の價値をば之が維持に必要な貨物の價値によつて測定したものに過ぎない。けれども勞働者は彼れの勞働を終へた後に彼れの勞賃を受取るので、又それのみでなく、彼が現に資本家に與へる所のものは彼れの勞働だといふことを知つてゐるので、彼れの勞働力の價値または價格は、彼にとつては、彼れの勞働そのものゝ價値または價格であるやうに見える。もし彼れの勞働力の價格（即ち彼が受取る勞賃）が三シリング——その中には勞働の六時間分が實體化されてある——であり、さうして彼が（その報酬に對し）十二時間働くならば、此等十二時間分の勞働は六シリングの價値に實體化されるのだけれども、彼は件の三シリングをば當然十二時間

1) ドイツ譯本は『勞働の價値について』と題する。（譯者）

分の勞働の價値または價格と考へる。この事から二つの結果が出てくる。

第一。勞働力の價値または價格は、勞働そのものゝ價値または價格と似寄つた外觀を取る、尤も、嚴密に言へば、勞働の價値または價格といふのは無意味の言葉だけれども。

第二。勞働者の一日の勞働の一部分のみが(報酬を)支拂はれ、他の部分は不拂であるに係らず、且その不拂のまたは剩餘の勞働が、正に剩餘價値または利潤の依つて形成せらるゝ所以の元本であるに係らず、恰も全體の勞働が支拂はれた勞働(報酬を受けた勞働)であるかの如く見える。

この不實の外觀が、賃勞働をば勞働の他の歴史的形態から區別する。勞賃制度の基礎の上では、不拂の勞働さへ支拂はれた勞働であるやうに見ゐる。之に反し、奴隷にあつては、彼れの勞働の支拂はれた部分さへ不拂であるやうに見ゐる。勿論、働くためには奴隷は生きて行かねばならぬ、さうして彼れの勞働

日の一部は彼れ自身の生活資料の價値を回復するために差向けられる。けれども彼とその主人との間には何等の取引が結ばれず、二者の間には何等の賣買が行はれぬものだから、總て彼れの勞働は全部無代で取られるやうに見えるのである。

他方に於ては、つい昨日まで歐羅巴の東方全部に存在してゐたと謂つても可いところの、かの農奴を取つて見よ。この者は、彼れ自身の農地または彼に當てがはれた農地で、例へば三日間働き、さうして後の三日間は、彼れの領主の土地で强制的の且つ無償の勞働に服しなければならぬ。だから此の場合には、勞働のうち支拂はるゝ部分と支拂はれない部分との區別が眼に見えて居り、それは時および場所において分たれてゐる、さうして自由主義者等は、無代で人を働かすとは怪しからぬ考だといふので、之に向つて盛に道德的非難を浴びせ掛けた譯である。

けれども事實の點からすれば、人が彼れ自身のため彼れ自身の土地で一週のうち三日間働き、さうして殘り三日間は彼れの領主の土地で無代で働くのも、或は、工場または仕事場で彼れ自身のために一日のうち六時間働き、更に彼れの雇主のために六時間働くのも、全く同一に歸する。尤も後の場合には、勞働の支拂はれた部分と支拂はれない部分とが分つことの出來ないやうに相互に混り合つて居り、さうしてそこへ契約といふものが這入り込み、また支拂ひは週の終りに受取られるといふことによつて、全取引の性質は、全然假面を被されてゐるけれども。無償の勞働が一の場合には自發的に提供され、他の場合には强制的であるやうに見ゆる。只それだけの差である。

以下私は「勞働の價値」といふ語を用うるにしても、それはただ「勞働力の價値」に對する世間の俗語として用うるまでゝある。

一〇、商品をその價値において賣ることによつて得らるゝ利潤[1]

假に一時間分の平均勞働が六ペンスに等しい價値に實體化され、または十二時間分の平均勞働が六シリング（一シリングは十二ペンス）に實體化されるとする。更にまた、勞働の價値は三シリングまたは六時間分の勞働の生產物だと假定する。然る時、もし一の商品を作り上げるために消費された原料や、機械の損耗や、その他のものに、二十四時間分の平均勞働が實體化されてゐたとするならば、その價値は十二シリングに上ぼる筈である。猶ほまた、資本家によつて使用さるゝ勞働者が、此等の生產手段に十二時間の勞働を加へるとするならば、此等の十二時間は、六シリングの附加價値において實體化さるゝであらう。だから生產物の總體の價値は、實體化された勞働の三十六時間分に上ぼり、十八

1) ドイツの譯本は『商品をその價値において賣るとき、利潤は如何にして得らるゝか』と題す。（譯者）

シリングに等しくなる譯である。けれども勞働の價値、即ち勞働者に支拂はれた勞賃は、僅に三シリングに止まつてゐて、勞働者の働いた剩餘勞働の六時間分は、商品の價値には實體化されてゐても、これに對して資本家は何等の對價を支拂はないのである。だから資本家は、この商品を十八シリングでその價値通りに賣ることにより、彼は彼が之に向つて何等の對價を支拂はざりしところの、三シリングの價値を實にするだらう。この三シリングが、彼によつて收めらるゝ剩餘價値または利潤を構成するであらう。かくて資本家は、彼れの商品をその價値以上の價格で賣ることによつてではなく、その眞實の價値で賣ることにより、三シリングの利潤を實にするであらう。

一商品の價値は、それに含まれてる勞働の總量によつて決まる。けれども其の勞働量の一部は、その對價が勞賃の形において支拂はれし價値のうちに實現され、その一部は、これに向つて何等の對價の支拂はれざりし價値のうちに實

現される。商品のうちに含まれてゐる勞働の一部は支拂はれた勞働であり、他の一部は不拂の勞働である。だから商品をばその價値において、即ちこれに費された勞働總量の結晶として、これを賣ることにより、資本家は當然利潤を得てそれを賣る筈になる。彼は彼が對價を費したところのものを賣るばかりでなく、また彼が何物をも費さなかつたところのもの——尤も其れは彼れの勞働者に勞働を費さしてはゐるが——を賣る。資本家のための商品の出費と、商品の眞實の出費とは、別々の物だ。だから私は繰り返す、正常の且つ平均の利潤は、商品をその眞實の價値以上にでなく、その眞實の價値において賣ることによつて得られると。

一一、剰餘價値が分解するに至る種々なる部分

剰餘價値、または商品の總體の價値のなかで勞働者の剰餘勞働または不拂勞働が實現されてゐる部分、私はそれをば利潤[1]と名づける。（ところで）この利潤の全體が、雇主たる資本家[2]によつて握り取られるのではない。（先づ）土地の獨占は、その土地が農業上の建築、鐵道、その他如何なる生産上の目的に使用され居るやを問はず、これが地主をして、地代の名の下に、かの剰餘價値の一部を割取するを得せしめる。他方において、勞働手段の所有が雇主たる資本家をして剰餘價値を生産せしめ、言ひ換ふれば、不拂勞働の一定量を彼れ自身に占有せしむると云ふ其の事實は、其等の勞働手段の全部または一部をば雇主たる資本家に貸してゐるところの、此等勞働手段の所有者をして、一言にして言へば、

1)profit.
2)employing capitalist. 企業者としての資本家の意味。『資本論』に産業資本家 (industrial capitalist) と稱せるものより少しく廣い。（譯者）

金貸しの資本家をして、彼れ自身のために件の剰餘價値の他の部分をば、利子の名の下に請求するを得せしめ、かくて雇主たる資本家としての資格において彼に殘るところのものは、産業利潤[3]または商業利潤[4]と稱せらるゝ部分だけになる。

剰餘價値の總高が、此の如く三範疇の人々の間に分割されるについて、如何なる法則が之を支配してゐるかと云ふことは、吾々の主題に全く關係のない問題である。しかし其の大半は、以上述べた所から出てくる。

地代、利子、および産業利潤は、商品の剰餘價値の、または商品に封ぜられた不拂勞働の、別々の部分に對する別々の名稱たるに過ぎぬ、さうして此等のものは、一樣に此の源から派出し、また此の源のみから派出するものだ。此等のものは土地そのものから出るのでも無ければ、資本そのものから出るのでも無い、けれども土地および資本は之が所有者をして、雇主たる資本家が勞働

3)industrial profit.
4)commercial profit.

者から絞取つた剰餘價値の中から、それ〳〵の割前を得せしめる。勞働者自身にとつては、この剰餘價値、彼れの剰餘勞働の結果、または不拂の勞働をば、全部雇主たる資本家が握り取つて仕まはうと、または雇主たる資本家がその一部をば、地代および利子の名の下で、第三者に支出するを餘儀なくせられやうと、それは太した問題ではない。雇主たる資本家が自分の所有して居る資本のみを使用し且つ彼れ自身が地主であると假定するならば、全部の剰餘價値が彼れの懷中に收まるのである。

雇主たる資本家は、剰餘價値の如何なる部分をば窮極自分自身の所屬に歸し得るとしても、（ともかく）この剰餘價値をば直接に勞働者から絞取るものは彼である。だから雇主たる資本家と賃勞働者との間における此の關係の上に、勞賃制度全體および現在の生産制度全體が懸つてゐる。それだから此の討議に參加された諸君の或者が、極めて微妙な議論のしかたをして、雇主と勞働者との間の此の基本的關係をば、第二次的の問題として取扱はうとされたのは、誤りである。尤もその人達が、一定の事情の下では、價格の騰貴は、雇主たる資本家、地主。金貸し資本家に對して、それからまた收稅吏に對しても、非常に不平等な程度に影響を及ぼす、と云はれたのは正しい。

上に述べたことから、も一つ他の結果が生ずる。

商品の價値の中で原料や機械やの價値を、一言にして云へば、使用された生産手段の價値を、代表してゐるに過ぎない部分は、全く收入[5]とはならないで資本を置き替えるに過ぎない。しかしそれとは別に、商品の價値の中で收入となる部分、即ち勞賃、利潤、地代、利子の形で費され得る部分が、勞賃の價値、地代の價値、利潤の價値等に依つて構成されてゐる、といふのは誤りである。吾々は先づ勞賃を捨てゝ、産業利潤、利子および地代をのみ論じやう。今述べたやうに、商品に含まれてゐる剰餘價値、即ち商品の價値の中で、不拂勞働の

5) revenue.

實現されてゐる部分は、三つの異れる名稱を有する異れる部分に分たれる。しかし商品の價値が、此等三つの構成部分の獨立の價値の和に依つて組成され或は形成されてゐる、と云ふのは、全く眞實の正反對である。

もし一時間の勞働が六ペンスの價値に實現され、勞働者の勞働日が十二時間を含み、この時間の半分が不拂勞働であるとすれば、その剩餘勞働は商品に三シリングの剩餘價値——即ち何等の等價の支拂はれてゐない價値——を附加するであらう。この三シリングの剩餘價値は、雇主たる資本家が何等かの割合で地主および金貸しと分配し得るところの、全元本を構成する。この三シリングの價値は、彼等が彼等の間に分配すべき價値の限度を成すのである。けれども雇主たる資本家が商品の價値に自分の利潤として任意の價値を加へ、それに他の價値が地主等のために附け加へられ、かくして任意に定められた此等の價値の和が、總價値を構成するのではない。だから、一定の價値を三つの部分に分解すること、三つの獨立した價値を加へて其の價値を形成すること、を混同し、かくして地代、利潤および利子の引き出される總價値をば、任意の大いさのものとする俗見の誤れることは、明かであらう。

もし資本家によりて實現せらるゝ總體の利潤が百ポンドであるならば、絶對的の大さとして觀察されたる此の額をば、吾々は利潤の高[1]と呼ぶ。しかし若し吾々が、出資されたる資本[2]に對して此等百ポンドの有する比を計算する時は、吾々はこの相對的の大さを利潤率[3]と呼ぶ。この利潤率は明かに二樣の方法において言ひ表され得る。

假に百ポンドを以て勞賃のため出資された資本だとする。(然る時)もし作り出さるゝ剩餘價値が同じく百ポンドであり、——このことは勞働日の半分が不拂の勞働から成り立つことを示す、——且つ吾々がこの利潤をば勞賃のために出資された資本の價額で測るとするならば、利潤率は百パアセントに上ぼると言

1)the amount of profit.
2)invest (放下する)と區別するために、advance を出資すると譯出する。(譯者)
3)the rate of profit.

ふべきだ、何故といふに、出資された價値は百であり、實現された價値は二百であるから。

これと異り、もし吾々が、當に勞賃のために出資された資本のみならず、出資された總體の資本、例へば五百ポンド――そのうち四百ポンドは原料、機械、その他のもの〻價値を代表するとする――について考へるならば、吾々は利潤率は單に二十パアセントに上ぼるに過ぎないと言ふべきだ、何故といふに、百ポンドの利潤は出資された總體の資本の五分の一に過ぎないから。[4]

（このうち）利潤率の最初の言ひ表し方が、支拂勞働と不拂勞働との間における眞實の比を、即ち勞働の掠奪――このフランス語を使ふことを許して貰ふ――の眞實の比を、吾々に示して與れる唯一のものだ。今一つの言ひ表し方は、普通に使はれてゐるもので、且つ確に或る目的には適合してゐる。何にしろ其れは、資本家が勞働者から無償の勞働を絞取る度合を隱すに、甚だ好都合なもの

4) ドイツ語への譯者が附註してゐるやうに、『資本論』では、マルクスが茲で謂ふ二種の利潤率のうち、第二のものゝみを利潤率と謂ひ、第一のものは之と區別して剩餘價値率と謂つてゐる。（譯者）

である。

私は以下なほ若干の考察をなすに當り、剩餘價値が種々の部門に分割されることには頓着なしに、資本家の絞り取る剩餘價値の全量を指すには、利潤なる語を用ひ、さうして利潤率なる語を用うる場合には、私は何時でも勞賃のために出資された資本の價値によつて利潤を測るであらう。[5]

5) 前に注意したやうに、以下利潤率とあるは、資本論における剩餘價値率に相當する。（譯者）

一二、利潤、勞賃、および價格の一般關係

一商品の價値から、原料および之に費された其の他の生産手段の價値を回復すべき價値を引き去るならば、即ち、それに含まれてゐる過去の勞働を代表する價値を引き去るならば、その價値の殘部は、最後に使用された勞働者によつて(その商品の生産のために)加へられた勞働の分量に分解するであらう。もしその勞働者が一日に十二時間働くならば、(さうして)平均勞働の十二時間が六シリングに等しき金の分量に結晶するものとすれば、六シリングといふ此の附加價値は、彼れの勞働の作り出した唯一の價値である。彼れの勞働時間によつて決定せらるゝ、この一定の價値は、彼および資本家の兩者がそれ〳〵彼等の割前または配當を引き出す唯一の元本であり、勞賃および利潤に分割さるべき唯一の價値である。この價値が此等二つのもの〻間に分割さる〻割合が種々であるからと言つて、そのために、この價値そのもの〻變化せざることは言を俟たない。また一人の勞働者の代りに勞働に從事せる全體の人を、一勞働日の代りに例へば千二百萬の勞働日を置き換へたからと言つて、話に何の變りもない筈である。

さて資本家と勞働者とは、ただ此の限りある價値を、即ち勞働者の全勞働によつて測られる價値を、分けるのに過ぎぬから、一方が餘計取れば他方は少く取り、一方が少く取れば他方は餘計取ることになる。如何なる場合でも分量が決まつて居れば、その一部分は他の部分が減ずるに逆比例して殖ゑるであらう。(だから)勞賃が變動すれば、利潤はそれと反對の方向に變動する。もし勞賃が下落すれば、利潤は騰貴するし、勞賃が騰貴すれば、利潤は下落するだらう。(例へば)前に掲げた假定の下に、勞働者がその作り出した價値の半分に等しいだけ即ち三シリングを得るならば、言ひ換ふれば、彼れの全勞働日が半分は支

拂はれた勞働から、半分は不拂の勞働から成り立つならば、資本家も亦た三シリングを得る譯だから、利潤率は百パアセントになるであらう。もしまた勞働者は僅に二シリングを得るだけであつて、即ち全勞働日の僅に三分の一を彼れ自身のために働くに止まるとするならば、資本家は四シリングを得、さうして利潤率は二百パアセントになるであらう。もしまた勞働者が四シリングを得、資本家は僅に二シリングを得るに止まるならば、(利潤率は)三十三⅓パアセント[6]に下落するであらう。しかし總て此等の變動は商品の價値には影響せぬであらう。だから、勞賃の一般的騰貴は利潤の一般率の下落を招く、けれども(商品の)價値には影響しない。しかし、たとひ商品の價値——それは窮極において其の市場價格を規定すべきもの——は、それに固定された勞働の全量によつて專ら決定せられ、その勞働が支拂はれた勞働と不拂の勞働とに分割せらるゝ割合によつて左右さるゝもので無いとは云へ、その事からして、例へば十二時間内に

6)五十パアセントとあるべき筈。(社會勞働黨發行のイギリス版およびドイツ譯本の脚註參照)

生産された或る一種の商品または數種の商品の價値が何時でも不變だ、といふ理窟が出る譯では決してない。一定の勞働時間内に、言ひ換ふれば、一定分量の勞働を以て、生産せらるゝ商品の數または嵩は、使用せらるゝ勞働の生産力に依存するので、その勞働の廣さ又は長さに依存するのではない。紡績勞働の生産力の或る程度を以ですれば、例へば十二時間の勞働日で十二ポンドの絲を生産し、生産力のより少き程度を以てすれば、僅に二ポンドしか生産し得ない。然る時、もし十二時間の平均勞働が六シリングの價値に實現せらるゝならば、第一の場合には十二ポンドの絲が六シリングに値し、第二の場合には二ポンドの絲が同じく六シリングに値する。だから一ポンドの絲が、一の場合には六ペンス(一シリングは十二ペンス)に値し、他の場合には三シリングに値する。かゝる價格の差異は、使用せらるゝ勞働の生産力の差異から生ずる。より大なる生産力を以てすれば、一時間の勞働が一ポンドの絲に實現され、より小なる生産

力を以てすれば、六時間の勞働が一ポンドの絲に實現される。一方の場合には、勞賃は比較的に高くて利潤率は低くとも、絲一ポンドの價格は僅に六ペンスであり、他方の場合には、勞賃は低く利潤率は高くとも、それは三シリングである。斯樣なことになるのは、絲一ポンドの價格はそれに費された勞働の總量によつて規定せられ、その總量が支拂はれた勞働と不拂の勞働とに分割される比によつて左右されぬが爲めだ。勞働の價格(勞賃)は高くとも安い商品を生産し得、勞働の價格(勞賃)は安くとも高い商品を生産し得るものだ、といふ私の前に述べた事實は、それ故にその自家撞着的の外觀を解く。それは、總て商品の價値は之に費された勞働の分量によつて規定されるものであり、さうして其れに費される勞働の分量は使用せらるゝ勞働の生産力に依存するものであり、從てまた、勞働の生産力の一切の變動に應じて變動するものだ、といふ一般的法則の表現に過ぎない。

一三、勞賃の値上げが企てられ又はその引下げが抗爭せらるゝ主要の場合

吾々は今愼重に、勞賃の値上げが企てられ又はその引下げが抗爭せらるゝ主要の場合を考究するであらう。

一。吾々の既に述べたる如く、勞働力の價値、または一層通俗の俗語で謂へば、勞働の價値は、生活必要品の價値によつて、または其等のものを生産するに要する勞働の分量によつて、決定せられる。しからば、もし一定の國において、勞働者の日々の平均必要品の價値が、三シリングで言ひ表されるところの六時間分の勞働を代表するものとすれば、勞働者は彼れの日々の生活資料の對價を生産するために、日々六時間働かなければならぬだらう。もし全勞働日(一日の勞働時間全體)が十二時間だとすれば、資本家は彼に三シリングを拂ふこと

によつて、彼にその勞働の價値を支拂ふであらう。そこで勞働日の半分が不拂の勞働となり、利潤率は百パアセントに上ぼるであらう。しかし今、生産力の減退の結果、例へば同じ分量の農産物を生産するのに、より多くの勞働を要することになり、かくて日々の平均必要品の價格は、三シリングから四シリングに騰貴したと假定する。さうしたならば、勞働の價値は三分の一、即ち三三⅓パアセントだけ高まるであらう。（さうして）勞働者が以前の生活標準により、彼等日々の維持に對する等價を生産するためには、勞働日のうち八時間が必要とされるであらう。だから剩餘勞働は六時間から四時間に減じ、利潤率は百パアセントから五十パアセントに落ちるであらう。しかし（かゝる場合に）勞働者は勞賃の値上げを要求するとしても、それは有らゆる他の商品の賣手が、彼れの商品の費用（生産費）が增加した時に、その增加した價値を得んと企てるのと同じで、彼はただ彼れの勞働の增加した價値だけのものを得んとするに過ぎぬであらう。もし勞賃が騰貴しないか、または（騰貴したにしても）必要品の增加せる價値を補償するだけに十分騰貴しないならば、勞働の價格は勞働の價値以下に落ち、かくて勞働者の生活標準は退化するであらう。

しかし變化は又これと反對の方向にも起り得る。勞働の生産力の增加したお蔭で、日々の平均必要品の同じ額が三シリングから二シリングに下落し、日々の必要品の價値に相當する等價を複生産するに、勞働日（一日の勞働時間）のうち六時間を要したものが、僅に四時間で濟むといふやうなことがあり得る。この場合には、勞働者は、以前三シリングで買ひ得たのと同じだけの必要品を二シリングで買ひ得るだらう。勞働の價値（勞賃）は實際に下落するかも知れない、しかしその減少した價値は、以前と同じだけの分量の商品を收得し得るであらう。かくて利潤は三シリングから四シリングに上ぼり、さうして利潤率は百パアセントから二百パアセントに上ぼるであらう。（かゝる場合には）勞働者の絶對的

の生活標準は依然同じでも、彼れの相對的勞賃[1]、從てまた、資本家のそれと比較しての彼れの相對的社會地位は下落するであらう。もし勞働者がこの相對的勞賃の下落に反抗するとしたならば、それはただ、彼れ自身の勞働の生產力增加に對し若干の割前を得、かくて社會的等級における從前の相對的地位を維持せんと企つるに過ぎぬ。かやうな譯で、イギリスの工場主は、穀物條例（外國より輸入する穀物に關稅を課したる法律）の廢止後――穀物條例廢止運動の際に與へたる、あれほど嚴肅な誓約を、無茶苦茶に破つて仕まつて――一般に十バアセントだけ勞賃を引き下げて仕まつた。勞働者の反抗は最初には破れた[2]、しかし、今委しく述べることは出來ぬが、種々の事情のために、失はれた十バアセントはその後再び恢復せられた。

二。必要品の價値、從て勞働の價値は、依然同じでありながら、貨幣の價値に一つの變化が起つたために、其等のものゝ貨幣價格の上に變化が起るといふ

1)資本家の所得となるべき利潤に對する關係から見た勞賃。(譯者)
2)1846-47年は非常なる事業停滯の年であつた。(ドイツ譯本脚註)

ことが在り得る。

以前よりも豐富な鑛山の發見および其の他の事情のために、例へば二オンスの金が、以前一オンスの金に掛かつただけの勞働で生產できるやうになつたとする。さうすれば、金の價値は二分の一、即ち五十バアセントだけ減少するだらう。然る時は、總ての他の商品の價値は其等のものゝ從前の貨幣價格の二倍を以て言ひ表されるであらうし、勞働の價値も亦た同樣な筈である。(即ち)以前は六シリングで表されてゐた十二時間分の勞働が、今は十二シリングで表されるであらう。(しかるに)もし勞働者の勞賃が六シリングに上ぼる代りに、三シリングで留まつてゐるならば、彼れの勞働の貨幣價格は僅にその價値の半ばに過ぎないことになり、從て彼れの生活標準も恐ろしく退化するであらう。このことは、もし彼れの勞賃が騰貴しても、金の價値の下落に比例しないならば、矢張り多少の程度において起るであらう。かゝる場合には、勞働の生產力にも、

需要および供給にも、また價値にも、何等の變化は起らないであらう。ただその價値の貨幣呼稱に變化が起るだけで、その他には何等の變化も起り得ぬであらう。(今)かゝる場合に勞働者は勞賃の比例的騰貴を主張すべきでないと云ふのは、彼は實物でなしに、名目で支拂はれることに滿足しなければならぬと云ふやうなものだ。總て過去の歴史の證明するところによれば、此の如き貨幣の減價が起つた場合には、資本家は何時でも、勞働者を騙すに好都合なこの機會を捉へるために油斷なく眼を配つてゐる。(勞働者も亦た油斷してはならぬ譯である)。大多數の經濟學者の證言するところによれば、金鑛地方の新たなる發見、銀鑛の作業の改善、および水銀の供給の廉價となりしこと等の結果として、今や貴金屬の價値は再び下落して來た。勞賃を高めんとする企てが大陸に於て一般的に且つ同時に起つて居るのは、この事から説明され得るだらう。

三。今まで吾々は、勞働日[3](一日の勞働時間)は一定の限度を有つたものと假定して來た。けれども、勞働日は、それ自身に決して不變の限度を有つものではない。これをば生理的に可能なるその極度の長さまで延ばさうと云ふのが、資本家の不斷の傾向だ、それは同じ程度において剩餘勞働が、從て其れから生ずる利潤が、增加する筈であるからだ。資本が勞働日を長くするに成效すればするほど、それは他人の勞働のより大なる分量を占取するであらう。第十七世紀ならびに第十八世紀に入つても其の初めの三分の二を通じて、十時間といふ勞働日が、イギリス全體に亘つての通常の勞働日であつた。反ジャコビン戰爭——それは事實においては、英國の勞働者團に對し英國の貴族によつて仕向けられた一の戰爭であつた——の間、資本はバッカスの酒神を祝うた、さうして勞働日をば十時間から、十四時間、十八時間に延ばした。マルサスといふ人は、萬々涙脆い感傷主義の人ではなかつたが、[4]彼は一八一五年頃に一つのパンフレットを著はし、もしこの種の事態が繼續されたなら、國民の生命はその根本の泉

3) working day. (九七頁二行目その他の箇所に前出)

4) 人口論の著者として隨分冷酷な議論を立てた人だから斯う云うてある。(譯者)

から破壊さるゝに至るだらう、と宣言してゐる。新たに發明された機械が一般に應用さるゝに至る數年前、一七六五年代に An Essay on Trade（實業論）といふ標題の下に、英國で、一つのパンフレットが公にされた。その匿名の著者――公然勞働階級の敵たることを名乗れる著者――は、勞働日の限界を擴張するの必要を切言した。彼はこの目的に對する種々の手段のなかで、勞役場を設くることを主張してゐるが、彼れの言ふ所によると、それは『恐怖の屋舍』（Houses of Terror）たるべきものだ。しからば彼が此等『恐怖の屋舍』に對して指定した勞働日の長さは何れだけか？　それは十二時間だ、――資本家や經濟學者や諸大臣やが、啻にその現行の勞働時間たるを認むるのみならず、十二歳以下の小供に向つてさへ必要な勞働時間だと認むるところのものと、それは正に同一の時間だ。

勞働者は彼れの勞働力を賣ることによつて、――彼は現在の制度の下では、

○

さうしなければならぬのだ、――その力の消費を資本家に讓渡すのだが、しかしそれは（その力の消費は）一定の合理的限度の内に行るべきだ。彼が彼れの勞働力を賣るのは、その自然の消耗は別にして、これを維持せんがためで、これを破壞せんがためではない。彼れの勞働力をその一日分または一週間分の價値で賣るに際しては、一日または一週のうちにその勞働力が二日分または二週間分の損耗または消耗に委せられざることが了解されてある。假に千ポンドに値する機械を取つて見よ。もしそれが十年間に使用し盡されるならば、それはその生産を助けた商品の價値に對して、年々百ポンドを附加するであらう。もし又それが五年間に使用し盡さるゝならば、それは年々二百ポンドを附加するであらう。言ひ換ふれば、その年々の消耗の價値は、それが消費せらるゝ速度に逆比例するものである。ところが勞働者は正にこの點に於て機械と分つところがある。機械はそれが使用せらるゝと正確に同じ比例において消耗する譯ではな

い。人は之に反し、勞働給付の單なる數字的合算で見られるよりも、より大なる比例において衰へる。

「勞働者は、勞働日をば以前の合理的範圍に短縮せんとする彼等の企において、また彼等が正常勞働日の法的規定を强制することの出來ぬ所では、勞賃の引上げ――それは啻に誅求せらるゝ剩餘の時間に比例するのみでなく、それよりもより大なる比例における引上げ――により過重の勞働を防止せんとする彼等の企において、彼等は彼等自身および彼等の種屬に對する義務を履行するに過ぎない。彼は纔に之によつて資本(家)の飽くなき簒奪に制限を置く。(元來)時間は人間の發達の場所である。勝手に處理することのできる自由の時間を有たぬ人間、そのものゝ全一生が、睡眠、食事、その他の單に生理的(に必要)なる中斷を除外すれば、總て資本家のために、彼れの勞働によつて吸收されてゐる人間、それは役畜(牛馬)よりも憐れなものだ。彼れは外國行きの富を生産するための單なる機械で、からだは壞され、心は獸化される。しかも近代産業の全史が示すところによれば、資本は、もし妨げられずんば、全勞働階級をば、この極度の退化狀態に陷れるために無茶苦茶の働きをするものだ。」

資本家は勞働日を延ばすことにおいて、より高き勞賃を支拂ひながら、しかも勞働の價値を低め得るであらう、勞賃の騰貴が誅求せらるゝ勞働のより大なる量に相應せず、かくて勞働力のより速なる衰頽が惹起さるゝ場合が、卽ちそれである。このことは他の方法でも行はれる。諸君の有産者的統計家は、諸君に告ぐるに、例へば、ランカシャアにおける職工の家族の平均勞賃が騰貴したことを以てするであらう。(しかも實際においては)、戸主たる男子の勞働の代りに、今日では彼れの妻および恐らくは三、四名の小供等までが、資本のジャガアノート[5]の車輪の下に投せられて居り、かくて(謂ふところの)勞賃總額の騰貴は、一家族から誅求せらるゝ剩餘勞働の總額に、決して相應してる譯ではないのだ

5) 印度の神話におけるクリシュナの偶像、――毎年この像を巨大なる車上に乘せ行列をなして牽き廻り、信徒これに轢き殺されれば、極樂へ行けると信じ、自らその車の下に身を投ぜしものと云ふ。(譯者)

が、彼等はその事實を忘れて仕まつてゐるのである。

勞働日に一定の制限が設けられてゐる場合においてさへ、――工場法の適用されてゐる總ての種別の產業には、今日此の如き制限が存在してゐるが、――勞働の價値の從來の標準を維持して行くだけにでも、勞賃の騰貴は必要となり得る。(何故といふに)勞働の强度[6]の增加のために、人は一時間內に、彼が以前二時間內において消費したと同じだけの生命力を消費するやうにさせられる。工場法の下に置かれてゐる事業においても、機械の運轉速度の增進や、一人の人間がその監視を受持つべき作業機械の數の增加せしことやによつて、如上の事實は既に或る程度まで實現されてゐる。もし勞働の强度、言ひ換ふれば、一時間內に費さるゝ勞働量の增加が、勞働日の長さ(一日の勞働時間)の短縮と然るべき比例を保つならば、勞働者は猶ほ得るところがあるであらう。(けれども)もしこの限度を超ゐるならば、勞働者は一の形において得たものを他の形において失

6)intensity. 正確には集約度(前にはさう譯出しておいた場所がある)と譯すべきであらう。(譯者)

ふ、さうしてさうなれば、十時間の勞働は以前の十二時間の勞働と同じ程度に破滅的となるであらう。勞働者は、その勞働の强度の高まるに相應するだけの勞賃の値上げに努力することにより、資本の這個の傾向を妨ぐることにおいて、ただ彼れの勞働の退化ならびに彼れの種屬の退化に反抗するに過ぎない。

四。諸君の總ては、資本主義的生產は、私が今說明を省略する種々の原因から、一定の定期的な循環を經て動くことを知つて居られる。それは靜穩、遞增的活氣、好景氣、事業過剩、恐慌、停滯の狀態を通じて動く。諸商品の市場價格および利潤の市場率は、此等の局面に伴うて、今その平均の下に沈んだかと思へば、復たその上に上ぼる。この一周期全體について考察したならば、諸君は、市場價格の一の歪みは他の歪みによつて補塡せられると云ふこと、およびその一周期を平均すれば、諸商品の市場價格はその價値によつて規定されると云ふことを、發見せらるゝであらう。さて、市場價格下落の時期、および恐慌

ならびに停滯の時期において、勞働者が、もし全然業を失ふに至らなければ、その勞賃を引下げられるのは確なことだ。(しかし)騙されて濟ます積りでなければ、此の如き市場價格下落の際においても、勞働者は資本家に對し、如何なる比例的程度において勞賃の引下げが必要となつたかを爭はなければならない。もし超過利潤の得らるゝ好景氣時代において、勞働者が勞賃の値上げのために戰つてゐなかつたならば、産業の一周期を平均して見て、彼は彼れの平均勞賃即ち彼れの勞働の價値さへも受取らぬことになるであらう。周期中の不景氣時代には彼れの勞賃が當然に引下げられるのに、周期中の好景氣時代に補償を求めないやうにしなければならぬと要求するが如きは、愚の骨頂である。一般的に、總ての諸商品の價値は、需要および供給の超わざる變動より生ずるところの、不斷に變化しつゝある市場價格の(高低の)相殺によつて、始めて實現せられる。現在の制度の基礎においては、勞働も他の商品と同樣なる一商品に過ぎない。だから勞働も亦た、同一の波動を通過しながら、その價値に相應するだけの平均價格を掴まねばならぬ。一方において勞働をば一個の商品として扱ひながら、他方において之をば商品の價格を規定する諸法則から除外しやうとするのは、不都合である。奴隷は生活資料について永續した固定した量を得てゐるが、賃勞働者はさうでない。彼は、他の場合における勞賃の下落を補償するだけにでも、一の場合において勞賃の値上げを獲得するべく試みなければならぬ。もし彼が資本家の意志、指圖をば、永久の經濟法則として受入れることに甘んずるならば、彼は奴隷の安固を享受することなしに、奴隷と一切の貧窮を分つに至るであらう。

私の以上述べた總ての場合において、――さうして其れは(實際の場合の)百中の九十九を占めてゐるが、――諸君は、勞賃値上げの要求は單にこれに先てる變化の足跡から生ずるので、それは生産の分量や、勞働の生産力や、勞働の價

値や、貨幣の價値や、誅求せらるゝ勞働の長さまたは强度や、需要供給の動搖に依存し且つ産業上の周期の種々の時期に適應するところの、市場價格の動搖やに關する、先行變化の必然的産物であり、一言にして蔽へば、資本の先行動作に對する勞働の反動である、といふことを發見せらるゝであらう。勞賃値上げの鬪爭をば總て此等の事情から獨立させて取扱ひ、勞賃の上に起る變化をのみ見て、その事の由つて生じた他の諸變化を看過するならば、諸君は過つた結論に到達せんために過つた前提から出發してると謂ふものだ。

一四、資本と勞働との鬪爭および其の結果

一。私は既に、勞賃の値下げに對する勞働者側の時々の抗爭、および勞賃の値上げを獲得せんとする彼等の時々の企畫は、勞賃制度から離すことの出來ぬものであり、それは勞働が商品と同一視されて居り、從て勞働は價格の一般的變動を規定する諸法則に從ふといふ事實から正に出てくるものだ、といふことを明かにし、更にまた、勞賃の一般的騰貴は利潤の一般率の下落を齎すもので、商品の平均價格または價値に影響するものではない、といふことを明かにした。そこで最後に起る問題は、資本と勞働との間における此の絶ゆることなき鬪爭において、勞働は果して如何ほどまでの成功をなし得べきか、といふことである。

私は一般化して之に答へ、さうして、總て他の商品におけると同じやうに、勞働についても次の如く言ひ得る、曰く、その市場價格は、長期の間には、その價値に順應する、だから(その市場價格の)一切の高低に拘らず、また勞働者が如何なることをしやうとも、彼は平均において只だ彼れの勞働の價値——それは彼れの勞働力の價値に歸着し、さうして其の維持および複生產に要する必要品の價値によつて決定され、また其等必要品の價値は窮極此等のものを生產するに要する勞働の分量によつて規定される——を受取るだけである。

しかし勞働力の價値または勞働の價値には若干の特徵があつて、總ての他の商品の價値と區別するところがある。勞働力の價値は二つの要素——一は單に生理的のもの、他は歷史的または社會的のもの——によつて形成せられる。その窮極の限度は生理的要素によつて決定せられる、言ひ換ふれば、勞働者階級はそれ自身を維持し且つ複生產し、その生理的存在を永續して行くために、生存および繁殖のため絕對に缺ぐべからざる必要品を受取らねばならぬ。だから、此等缺ぐべからざる必要品の價値は、勞働の價値の窮極限度を形造る。他方において、勞働日(一日の勞働時間)の長さも亦た、窮極の、尤も可なり屈伸性に富んだ、限界によつて制限せられる。(卽ち)その窮極の限度は、勞働する人の生理的の力によつて定まる。もし彼れの生命力の日々の消盡が一定程度を超過するならば、それは日々繰り返し發揮され得なくなる。しかし、既に言つたやうに、この限度は甚だ屈伸性に富んでゐる。不健康な且つ短命なゼネレーション(代)を急ぎ目に續けて行けば、元氣な且つ長命なゼネレーションの系列と同じやうに、(一先づ)勞働市場を維持して行くことはできる。

この單なる生理的要素に加へて、勞働の價値は如何なる國においても因襲的の生活標準[1]によつて決定せられる。それは(因襲的の生活は)單なる生理的の生活(生きて行くといふだけのこと)ではなくて、人々が其の下に置かれ且つ其の下で育てら

1)それが前にいふ歷史的または社會的の要素である。(譯者)

れるところの、社會的諸條件から出てくる一定の慾望の滿足である。（元もこれは生存上絶對的に必要だと云ふ譯ではないから）イギリスの生活標準はアイルランドの標準に引下げられ、ドイツの百姓の生活標準はリヴォーニアの百姓のそれに引下げられ得る。この歴史的の因襲および社會的の慣習が如上の點につき重大な關係を有つてゐると云ふことは、ソーントン氏の『人口超過』に關する著書から、諸君の學び得るところだ。氏はこの著書において、イギリスの種々の農業地方における平均勞賃は、其等の地方が農奴の狀態から出て來た當時の事情が好かつたと否とに應じて、今日でも猶ほ大小の差を有することを示してゐる。

勞働の價値のなかに這入り込む此の歴史的または社會的の要素は、擴げることもできれば、縮めることもでき、或は生理的限度しか何物も殘らぬやうに、全く無くして仕まふこともできる。反ジャコビン戰爭――それは、度し難き戸位素餐者たる老ヂョーヂ・ローズが常に云つてゐたやうに、吾々の神聖なる宗

教の慰安をフランスの異教徒共から救はうとして起されたものであるが――の間には、吾々が前の章において隨分優しく取扱つておいたあのイギリスの善良な農業經營者達は、農業勞働者の勞賃をば單なる生理的最小限以下にすら引き下げ、この種族の生理的永續に必要なその不足部分は救貧法によつて補つたのである。これは賃勞働者を奴隷に化し、シェークスピアの描いた自負心ある小作農を被救恤民たらしむる最上の方法であつた。

諸君は違つた國々における標準勞賃または勞働の價値を比較することにより、また同じ國の違つた歴史時代について之を比較することにより、勞働の價値そのものは――たとひ總ての他の商品の價値は不變のまゝであると假定しても――固定しない、可變的の大きさのものだ、と云ふことを發見せらるゝであらう。

同樣の比較は、啻に利潤の市場率が變動するのみでなく、その平均率も亦た

變動する、といふことを證明するであらう。

しかし利潤については、その最低限を決定すべき法則は存在しない。その低下の窮極の限度は何うだと云ふことを、吾々は言ひ得ないのである。何故吾々はその限度を確定し得ないか？　それは、吾々は勞賃の最低限を確定し得るけれども、その最高限を確定し得ないからである。吾々のただ言ひ得るところは、もし勞働日の限度が決まつてゐるならば、利潤の最高限は勞賃の生理的最低限に適應するといふこと、および勞賃が決まつてゐるならば、利潤の最高限は、勞働者の生理的の力と兩立し得る限りの、勞働日（一日の勞働時間）の延長に適應するといふことである。だから利潤の最高限は、勞賃の生理的最低限と、勞働日の生理的最高限とによつて制限せられる。この利潤率の最高限の二つの限度間において、變動の廣大な等差が可能だといふことは、言を俟たない。その現實の程度の確立は、ただ資本と勞働との間における絶えざる闘爭——資本家

は勞賃をばその生理的最低限に引下げ、さうして勞働日をばその生理的最高限に延ばさうと絶えず努めてゐるのに、他方勞働者はこれと反對の方向に絶えず壓してゐる——によつてのみ決定せられる。

事は闘爭者同志の相互の力の問題に歸する。

二。イギリスにおける勞働日の制限に關しては、總ての他の國々におけると同じやうに、それは立法的干渉によらなければ到底決定されなかつた。この（立法的）干渉も、外部からする勞働者の絶えざる壓迫がなかつたならば、到底起らなかつたであらう。けれども兎も角、この結果は、勞働者と資本家との間における私的協約では得られなかつたものである。一般的政治行爲が此の如く必要とせらるゝといふこと其れ自身が、單なる經濟的活動においては資本がより強き側だといふことの證據を提供する。

勞働の價値の限度に關しては、その現實の決定は、何時でも需要および供給

に依存すると言ひ得るが、茲に需要と謂ふのは資本の側における勞働の需要を意味し、供給と謂ふのは勞働者による勞働の供給を意味する。殖民地諸國においては、需要供給の法則は勞働者に仕合せする。だからアメリカでは比較的に勞賃の標準が高い。資本は其處でもその出來る限りの事をしてゐるだらう。(けれども)賃勞働者が絶えず獨立自存の農民に轉化することによつて、勞働市場が絶えず不足勝ちにされるのを、妨げることは出來ない。賃勞働者といふ地位は、アメリカ人の大多數にとつて、單に見習時代に過ぎぬので、彼等は早かれ晩かれ其の地位を去ることが確かであるのだ。かゝる殖民地の狀態を改良するために、母國たるイギリスの政府は、暫らくの間、謂ゆる近代の殖民說を受け容れて、賃勞働者が餘りに速やかに獨立農民に化するのを防ぐために、殖民地における物價を人工的に高價ならしめたのである。[2)]

しかし吾々をして、資本が生產の全過程の上に跋扈してゐるところの、舊文

2) マルクスの茲に言ふところが、その當時の事情に屬するといふことは、言ふまでもない。(譯者)

明諸國に移らしめよ。例へば、一八四九年より一八五九年に至る間のイギリスにおける農業勞賃の騰貴を取つて見よ、農業經營者は、——吾々の友人のウェストンならば彼等にさう助言するだらうと思ふが、——小麥の價値を高めることも、その市場價格を高めることさへも出來なかつた。却て逆に、彼等はその下落に逢つた。けれども此等十一年の間に、彼等は總ての種類の機械を應用し、より科學的の方法を採用し、耕地の一部を牧地に轉換し、農地の大さを、從て生產の規模を增大し、かくて此等およびその他の方法で勞働の生產力を增すことにより勞働に對する需要を減少し、再び農業上の人口を比較的過剩ならしめた。勞賃の騰貴に對する——或は早き或は晩き——資本の反動が、舊開國において取るところの一般的方法は、卽ち是れだ。機械は勞働と絶えざる競爭の地位に在るもので、勞働の價格が一定の高さに達した後に始めて採用せらるに至ることが屢〻であるとは、リカアドの正しく注意したところだが、しか

し機械の應用は、勞働の生産力を增加するための多くの方法の一つに過ぎない。（なほ）普通勞働者を比較的過剩になす此の同じ發達が、正に他方においては、熟練勞働を簡單化し、かくてその價値を輕減せしめつゝある。

（以上と）同じ法則は他の形において得られる。（蓋し）勞働の生産力の發達と共に、資本の蓄積は、勞賃の比較的高き率に拘はらず、加速度を以て行はれる。だから、嘗てアダム・スミスが――彼れの時代には近代の産業はまだ幼稚であつた――論じたやうに、この資本の加速的蓄積は、勞働者の勞働に對する需要の增加を確保することによつて、差引き勞働者側の利益になるものだ、と論ずる者があるかも知れない。それと同じ見地からして、現代の多くの論者は、過去二十年間イギリスの資本はイギリスの人口より遙に增加したに拘はらず、勞賃がそれほど騰貴してゐないのを、不思議がつてゐる。けれども（實は）資本蓄積の進行と同時に、そこには資本の構成に遞增的の變化が起つたのだ。全體の資本のうち、固定資本、即ち機械や原料やその他あらゆる形態における生産手段から成り立つてゐる部分は、資本の他の部分、即ち勞働の購買のため勞賃として支出されるものに比較して、次第に遞增してゐる。この法則はバアトン氏、リカアド、シスモンディ、リチャード・ヂョン教授、ラムゼイ教授、シャープリエー、およびその他の人々によつて、既に正確な形に――その正確さには多少の差があるが――記述されてある。

資本の此等二つの要素の比例が元と一對一であつたとすれば、産業の進歩に伴ひ、それは五對一、乃至その他のものとなるであらう。もし總體の資本六〇〇の中、三〇〇が勞働手段や原料やその他のものに放下され、三〇〇が勞賃に支出されてゐるのなら、三〇〇人の勞働者の代りに六〇〇人の勞働者に對する需要を作り出すためには、總體の資本が倍加されれば可い譯だ。けれども六〇〇の資本の中で、五〇〇が機械、原料、およびその他のものに放下され、勞賃には僅に一〇〇し

か支出されてゐないのなら、三〇〇人の勞働者の代りに六〇〇人の勞働者に對する需要を作り出すためには、同じ資本が六〇〇から三六〇〇に增加しなければならぬ。だから、產業の進步において、勞働に對する需要は、資本の蓄積と並行するものではない。それは依然として增加はするが、しかし資本の增殖に比すれば、絕えず遞減的な比において增加するに過ぎない。

此等僅かの示唆は、近代產業の發達そのものが、勞働者に對して資本家の方が都合が好くなるやうに次第〳〵に形勢を決定する筈になつてゐると云ふこと、ならびに其の結果として、資本主義的生產の一般傾向は、勞賃の平均標準を高めるのではなくて却て之を低め、勞働の價値をば多少とも其の最低限度に壓し付けるものだと云ふことを、指し示すに十分である。しかし、この制度內における事態の傾向は此の如くであるとしても、そのことは、勞働階級が資本の暴食に對する彼等の抗爭を斷念し、かくて彼等の（蕪遇の）一時的改善のために時偶起る機會を最善に利用しやうといふ企を放棄しなければならぬ、といふことを意味するのではない。彼等がもしさうしたならば、彼等は見放されて仕まつた慘敗者の一樣なる平準の群に墮落して仕まふであらう。私は既に、勞賃の標準に對して彼等が鬪爭するのは、全勞賃制度から離すことのできぬ附隨事件だといふこと、勞賃を引上げんとする彼等の努力は、百の場合のうち九十九までは、勞働の與へられたる價値を維持せんがための努力に過ぎないと云ふこと、および彼等が勞働の價格について資本家と爭ふの必要は、彼等自身を商品として賣らなければならぬといふ彼等の狀態に固有のものだといふこと、等を明かにしたと考へる。彼等（勞働者）がもし資本との彼等日々の衝突において臆病に退却するならば、彼等は明かに、より大なる運動を起すことについて總てその資格を失ふであらう。

（しかし）これと同時に、さうして勞賃制度に含まれてゐる一般的隷屬からは全

く離れて、勞働者階級は此等日々の鬪爭の窮極の效果をば、自分で誇大視しないやうにしなければならぬ。彼等の忘れてならぬことは、彼等は（只）結果について戰つてゐるだけで、此等結果の原因と戰つてゐるのではないと云ふことだ、彼等は向下の運動を阻止しつゝあるだけで、その方向を變じつゝあるのではないと云ふことだ、彼等は姑息療法をしてゐるだけで、病氣を根治しつゝあるのではないと云ふことだ。だから彼等は、資本の飽くことなき蠶食または市場變動から、絶間なく發生するところの、此等の避くべからざるゲリラ戰[3]に全く沒頭して仕まはないやうに、しなければならぬ。彼等は、現時の制度たる、そは、そが彼等の上に課するところの一切の貧窮と共に、社會の經濟的改造に必要なる物質的條件ならびに社會的形態をば同時に釀成しつゝあるものなることを、理解しなければならぬ。彼等は、「正當なる一日分の勞働に對して正當なる一日分の勞賃」といふ保守的の格言の代りに、彼等の旗印の上に革命的の警

3)ゲリラと謂ふは、元とスペインの北部で用ひられた戰法で、本隊よりの指揮によらず、個々の獨立隊が不規則に小競合をなすこと。（譯者）

句「勞賃制度の全廢」を書き誌すべきである。

當面の問題をば公平に取扱ふために私の已むなく深入りしたところの、甚だしく長い、さうして恐らくは諸君に退屈な思ひをさせたであらう此の解說の後に、私は、次の斷案（レゾリューション）を提供して終を結ばうと思ふ。

第一。勞賃率の一般的騰貴は、利潤の一般率の下落を齎すであらう、しかしながら、廣く言へば、商品の價格には影響せぬであらう。

第二。資本主義的生產の一般傾向は、勞賃の平均標準を高めるのではなくて、却て低める。

第三。勞働組合は資本の蠶食に對する抗爭の中心としては立派な働きをする。彼等は彼等の力の無分別なる使用のため、部分的に失敗する。（しかし）彼等にして若し、現存の制度の結果に對するゲリラ戰にのみ自らを局限し、[4] それと

4)現存の制度たる資本主義はそのまゝにして置いて、この制度から當然に生ずべき結果に對してのみ小ぜり合ひの戰爭を企つるに止まるならば、といふ意味。（譯者）

同時に現存の制度を變改せんと試むることなく、彼等の組織されたる力をば、勞働階級の最後の解放、卽ち勞賃制度の窮極の廢止に向つての一槓杆として使用することなくば、彼等は全般的に失敗する。

マルクス原著
勞賃・價格・
および利潤

大正十年十二月一日印刷
大正十年十二月五日發行
大正十三年七月十日十三版
大正十三年八月十日改版發行

正價 金壹圓拾錢

檢印

譯者 河上肇

發行者 京都市丸太町通寺町東入 入坂淺次郎
印刷者

發行所 京都市丸太町通寺町東 振替穴數三五二六四番 弘文堂書房

弘文堂印刷所

河上肇著

十一版 社會組織と社會革命 菊判六〇〇頁 正價金五圓 內地送料金廿七錢

廿二版 唯物史觀研究 菊判三三六頁 正價金參圓 內地送料金廿七錢

十九版 資本主義經濟學の史的發展 並製金四圓五拾錢 上製金六圓 內地送料金卅六錢

新刊 賃勞働と資本 四六判一〇〇頁 正價金七拾錢 內地送料金拾參錢

京都 弘文堂 發行

535
24

落